
RED ZONE

天音由羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RED ZONE

【Nコード】

N9504Z

【作者名】

天音由羽

【あらすじ】

この世界には夜の闇に巢食う獣達を裁く者達がいた。

「魂を狩る者」

ソウル・ハンター

それは、限りなく闇に近い危険領域「RED・ZONE」に踏み込むことを許された者達の事である。

「RED・ZONE」…

少年達は闇に生きる

Stage 1

この世界には夜の闇に巣食う獣達を裁く者達がいた。

「魂を狩る者」ソウル・ハンター

それは、限りなく闇に近い危険領域「RED・ZONE」に踏み込むことを許された者達の事である。

「RED・ZONE」…

少年達は闇に生きる

Stage 1

時刻は午前二時を回っていた。

とあるマンションの一室、ボタンとドアが音をたてた。

暗闇の中に白いシャツがぼんやり浮かぶ。

・二人はまだか…

「ふう」

ため息が冷たく響いた。

パチン

スイッチを押すと、一気に部屋中が明るくなる。

その眩しさに少年は少し目を細めた。

そしてゆっくりとソファに腰をおろす。仕立てのいい高級ソファは彼の身体を受け止めて沈む。

長い足が少しだけ窮屈そうだ。

そうして彼が少し落ち着いた頃、事態は急変した。
ピピピピピ

ケータイがけたたましい音を立てる。

「はい？」

「あつ、蒼衣っ？」

やたら焦った声がする。

「伽羅が倒れたんだ」

その言葉に少年の表情が一変する。

「右腕二ヶ所に切り傷負ってて、しかもかなり深いんだ。どうしたらいい？」

「何：？分かった、とりあえずそこにいろ。すぐ行く」

ピッ

少年は勢いよく立ち上がると、玄関にあるケースを取り、そのまま部屋を出る。

どうやら緊急事態のようだ。

勢いよくエンジンをふかし、バイクを飛ばした。

口元に通信機を持っていく。

「どうした？蒼衣君か？」

イヤホンから澄んだ低めの声が聞こえる。

「はい。至急第三倉庫に車で向かってください。俺もすぐに追いつきます」

いつもより早口で少年は言った。

「ミスしたのか？」

すり抜ける風の音で相手の声にノイズが混ざる。

「ミスじゃないですよ。任務は完了です。でも伽羅が重症らしいんです」

ぐっ

そう言ってハンドルを握る手に力を入れた。

少年は更に風を切っていく。

「重症？分かったすぐに向かう。オペの道具は？」

相手の声にも緊張が表れる。

「持ちました。あっちに着いたら無菌シートをワゴンの後部座席に張っておいてもらえますか？」

「了解」

プッ

通信が切れた。

バイクはどんどん加速する。

落ち着いているように見えるが、やはり焦っているらしい。
少年、新堂蒼衣は真夜中の道路を走り抜けた。

その頃、倉庫内では蛍と呼ばれていた少年が、気を失って横たわる少女の腕に応急処置を施していた。
少しだけ不慣れな手つきだ。

何で倒れたんだろう
心の中に疑問が浮かぶ。

目の前で倒れている少女伽羅は、夕飯もしっかり食べ、常のトレーニングの結果、体力が無く倒れたとは考えられない。
ましてミッシヨン中にミスなどするはずも無いのだ。
しかし蛍には一つだけ気になる事があった。

伽羅が倒れる寸前の、あの表情。

伽羅、怯えてた：

蛍は静かに眠る伽羅の顔を見つめた。
痛みも苦しみも顔に表れていない。
ただ静かに眠っているだけである。

蛍は止血を終えると自分の上着を伽羅にかけた。
それからすぐ一台のワゴン車が現れ、一人の秀麗な人物が蛍の前に姿を現した。

「彼女を車の中に移動する。君は足の方を持ってくれ」
「：はい」

蛍は戸惑いながらも従う。

この人、一体誰なんだ？
喉まで出かかった疑問を、寸でのところでひとまず飲み込む。
今はそんな時ではない。

二人が伽羅を移動させると、すぐに蒼衣も駆けつけた。
無菌シートの中で素早く蒼衣が処置を始める。

伽羅の腕の傷口はパツクリ開いていた。

「酷いな、縫うしかない。蛍、局部麻酔打てるか？」

「ああ」

蚩は一本の注射器を受け取ると、伽羅の細い腕にスツと針を入れる。

「どのくらいかかる？」

先刻表れた人物が問う。

「すぐです」

「そうか。しかし…君達のバイクはこちらで届けさせよう。このまま君達のマンションへ直行する。作業、出来るか？」

「はい。お願いします」

蒼衣は一言そう言つと、早速作業を開始した。

そしてすぐに車が動き出す。

蚩はじつと蒼衣の手元を見ていた。

「蚩、当時の状況分かるか？」

蒼衣が問う。

「少しだけ」

蚩の表情が一瞬沈んだ。

「分かることだけでいい」

作業を続けながら蒼衣が言つた。

「分かる事って言つても何もないよ。伽羅は突然倒れたんだ。…それだけ」

「それだけ？」

蒼衣が問う。

突然倒れるなんて、伽羅は貧血持ちではないはずだ。

「うん。でも怯えてたんだ、倒れる寸前」

「怯えてた…？」

一体何に？蒼衣の中に疑問が浮かぶ。

今回の件で伽羅が怯える材料など無かつたはずだ。

「それで、そのまま今に至るのか？」

「うん。でも不思議なんだけどさ、伽羅、腕に傷を負つても痛そうにしてないんだ。倒れてからずっと、ほら今みないた表情のままで」「痛みを感じていないってことか？」

そういえば麻酔を打つ前から痛がっていなかったと、蒼衣は瞬時に記憶をたどる。

この状態、どこかで見た気がした。
カチャ

手にしていた道具を置くと、鈍い音がする。

フツと蒼衣の中に何かがよぎった。

遠い過去の記憶…。

「伽羅、伽羅」

蒼衣は呼びかけてみた。

しかし反応は無い。

「やっぱり…傷のせいじゃないな」

蛭にそう言つと蒼衣はポケットから携帯電話を取り出した。

「もしもし雪乃さん？」

蒼衣が言つと、かすかに相手の声が聞こえる。

蛭はじつと様子を見ていた。

「心の殻に閉じこもった場合、どうすれば出せる？」

「心の殻？それって伽羅ちゃんのこと？」

少し高めの声がする。

「うん。何が理由なのかはまだ分からないんだけど」

「……」

「雪乃さん？」

蒼衣が呼びかける。

「あのね、まさかとは思うけど思い当たるのはこれしかないの」

雪乃にしては珍しく回りくどい言い方だ。

蒼衣は眉をひそめる。

「四年前の、例の事件。覚えてるでしょう？恐らく今もあの時の状況と同じなんじゃない？」

「うん…でも標的の^{ターゲット}の中には誰一人いなかったのに」

「死体は確かめた？」

！？

雪乃の言葉ではつとする。

「確かめて、ない」

「そう…」

ため息混じりに雪乃が呟いた。

「戻せないかな、このままじゃ…」

ぎゅっと唇をかみ締める。

情けない 蒼衣は拳を握りしめた。

伽羅はまるで人形のように眠り続けている。

「戻せないことは無いわよ、蒼衣ちゃん」

「え？」

くすっ

電話越しに笑ったような息遣いが聞こえる。

「安心しなさいって。でもね、戻すのは私じゃないと出来ないわ。

もちろん蒼衣ちゃんにも手伝ってもらうけど」

「うん」

雪乃の声に少しだけ安心する。

「マンションに向かってるんでしょ？すぐ行くわ」

「でも雪乃さん、修一さんは？」

「修ちゃんなら大丈夫よ。私達も指令が来てて、さっき帰ってきた

ところなの、そうじゃなかったらこうして電話になんか出てないわ」

明るく雪乃が言う。

確かに最もだ。

「じゃあまたあとで」

「ええ」

ピ

二人の会話が終わる。

蛭は息を吐くと窓側に背をつけて座り込んだ。

「マンションまでどれくらいですか？」

蒼衣が運転席にいる人物に問う。

「すぐだよ。あと五分もあれば着く」

「そうですか」

そういつて蒼衣も静かにゆっくりと腰を降ろした。

「レッド・ゾーンか・・・」

蒼衣がふと呟く。

「レッド・ゾーン」とは、命の保証など存在しない、危険領域のことである。

蚩は無意識に蒼衣の方を向いていた。

「何で伽羅は倒れたんだろう」

まるで自分に問い掛けるように蚩が問う。

「封印された過去のせいだ」

「？」

「伽羅にとってそれはタブーなんだ。その過去がほんの少しでも蘇れば今のようになる」

蒼衣は目で伽羅を指した。

蚩はただ伽羅を見つめる。

それからすぐ四人を乗せた車は、あるマンションの前へ着いた。

無言のまま蚩は蒼衣の道具ケースを持ち、伽羅を抱き上げて車を降りた。

「私はこのまま本部へ戻る。もし異常があつたらすぐに連絡してくれ」

「はい、ありがとうございました」

蒼衣が軽く頭を下げる。

そして車はあつという間に走り去っていった。

「俺、先に行って鍵開けてくる」

「ああ、気を付けろよ。足元暗いから」

「うん」

笑顔でうなずくと蚩は走り去っていく。

蒼衣はゆっくりと歩き始めた。

腕の中で伽羅が静かに寝息を立てている。

伽羅、一体何を見たんだ？それとも読んだのか？

心の中で語りかけたが反応はない。

二人が部屋へ着くとすでに明かりはつき、伽羅のベッドもあとは伽羅を寝せるだけの状態になっていた。

「局部麻酔なのに何で起きないんだ？」

蛍が静かに問う。

ポフ

蒼衣はそつと伽羅をベッドに降ろし、毛布を掛けた。

「まさかこのまま・・・」

「安心しろ、大丈夫だ。止血も早かったし傷自体もそれほどじゃない。今は肉体的疲労が重なってるだけだ。そのうち目覚めるだろ。」

命に別状はない」

蒼衣は優しくそう言った。

その様子に蛍は安心したのか、息を吐き笑顔を見せた。

そして二人は静かにドアを閉め、リビングへ向かう。

AM 3:00

外はまだ眠りに満ちている。

蛍は黙って外を見つめていた。

二人の間に沈黙が訪れる。

しかし蛍は聞きたいことが山ほどあった。

いつもならそれをすぐ問うところだが、何故か今回だけは聞いてはいけないような気がして、蛍は黙っていた。

まるで魚の小骨がノドに刺さっているような気分だ。

蒼衣はそんな蛍の気持ちを察していた。

「蛍、いつか時が来たら必ずお前にも話すよ。でも今はまだ知らない方がいい。知らなくていいんだ」

蛍に目を向けて静かに言う。

- まだ知らなくていい？ -

蛍は蒼衣のほうへ向き直った。

心の中で反発している自分がいる。

何故自分には教えてくれないのか、と。

「俺はガキじゃない、そう言いたいんだろ？」

「っ、そうだよ俺はもう…っ」

蒼衣の言葉に蛭はぐっところえる。

すると、ポンと頭の上に蒼衣の手が乗せられた。

「？」

蒼衣は微笑んでいる。

「そうじゃないんだ。お前がガキだからとか、年下だからとか、そんな事は関係ないんだ。俺は伽羅を守りたいだけなんだよ」

「伽羅を…？」

蛭の表情がふつと変わる。

「封印された過去の事を、伽羅はもう忘れてる。それを思い出させたくないんだ」

どこまでも優しい蒼衣の声に、蛭は今までぐっと入れていた力を抜いた。

蒼衣は何を言いたいのだろう。

蛭は蒼衣の言葉に耳を傾ける。

「伽羅の知らないところで、伽羅を守ってる人がいる。その事を本人が知れば興味を示すだろう？ そうなったら困るんだ。だから周りには知ってほしくないんだよ。何が今動いてるのかって事を」
真剣だった。

こんなに温かくて真剣な蒼衣の表情を見るのは初めてだった。

何だか自分が恥ずかしく思えてくる。

蛭は静かにソファに座った。

「ごめん」

そんな言葉が自然に出てくる。

「俺やつぱガキだ。何も考えてなかった。ただ知らない人がいきなり現れたりして、頭がついていけなかっただけなんだ…ごめん」

蛭はそう言って苦笑した。

そしてスツと立ち上がり自室へ向かい、蒼衣に顔を向けると

「おやすみ」

蚩は明るくそう言って部屋の中へ入っていった。

- 蚩... -

深い溜息が口をつく。

話せないことがもどかしい。

蒼衣はキッチンへ行き、ヤカンを火にかける。

そして食器棚からマグカップとコーヒーを取り出した。

一種のリラックス法であり、眠気覚ましでもある。

蒼衣はもう一つ袋を取り出した。

これは伽羅の分だ。

用意を終えたと蒼衣はソファに座った。

もう少しすれば雪乃がやってくる。

そのせいか落ち着けば落ち着こうとするほど落ち着かない。

早く伽羅を助けてほしい、蒼衣は心底そう思った。

伽羅のことが心配なのだ。

いてもたってもいられない蒼衣は立ち上がり、伽羅の部屋へ向かう。

ドアを開けると伽羅は相変わらずのまま眠っていた。

伽羅の鼻の辺りに手をかざす。

- 息はしてるな -

蒼衣は安心して毛の長い柔らかな絨毯の上へ座った。

しかしすぐに不安がよぎる。

全ての記憶が甦っているのではないか…。

蒼衣は伽羅の心にシンクロしてみる。

蒼衣が生まれながらにして持っている能力ちからの一つだ。

いつもならうるさいくらいに流れ込んでくる伽羅の感情、しかし今

は何一つ流れてこない。

完全に伽羅は心を閉ざしていた。

全身から力が抜ける。

蒼衣はベッドサイドに寄り掛かり、天井を仰いだ。

カチャ

静かにドアが開く。

「玄関開いてたわよ？無用心ね」

黒の上下に身を包んだ女性が苦笑する。

「雪乃さん…」

蒼衣は自然と立ち上がった。

「大丈夫よ、私が閉めておいたから。…さてと」

一瞬にして彼女の表情が変わる。

柔らかな笑顔が消えた。

雪乃は目を閉じると伽羅の額に手を当てる。

「どうやら全てを思い出した訳じゃないようね。彼女が見てるのは真っ赤な景色。これ以上この状態にしたら危ないわ。精神が崩壊する」

雪乃は手を離し、目を開けた。

「断片的な記憶が甦ってるわ。それも一番甦ってほしくない部分だね。とにかくもう一度封印して、伽羅ちゃんを起こすわ」

そう言うのと再び雪乃は目を閉じて手を当てる。

蒼衣も静かに伽羅の感情にシンクロを試みた。

バツ

目の前に「赤い景色」が広がる。

蒼衣も目撃した四年前の景色だった。

血の色に染まった真っ白なカーテン、小さな手についた真っ赤な血、そして怯えながらうずくまる幼い伽羅…。

「伽羅、帰って来い。お前がいる場所はそこじゃない。手を伸ばすんだ、ホラ」

蒼衣は小さな子供の姿をした伽羅に手を伸ばす。

涙をいっぱい溜めた瞳が蒼衣の方をじっと見つめた。

次第に伽羅の姿が成長し、今の姿に変わっていく。

「蒼衣…」

細い指が彼の手に届く。

蒼衣はぐっと伽羅の手を引き寄せた。

「よくやったわ蒼衣ちゃん。そのまま起こして」

どこからか雪乃の声が聞こえ、蒼衣は伽羅を抱き起こした。少しずつ景色が変わっていく。

そしてゆっくり目を開けると、伽羅はしっかりと蒼衣の手を握っていた。

「蒼衣？あ…私、赤い景色が…」

震える手で蒼衣の手を握る。

「大丈夫だよ、伽羅」

蒼衣は優しく微笑みかけた。

「伽羅ちゃん、まだ少し横になってた方がいいわ」

「え？」

見知らぬ女性に伽羅が目丸くする。

しかしゆっくりと伽羅は横になった。

すかさず雪乃が伽羅の額に手を当てる。

次の瞬間伽羅は再び眠りについた。

そして少しすると、雪乃は手を離れた。

「これで大丈夫よ、記憶は封印したわ。後はこのまま目覚めるのを待っただけね」

「うん」

蒼衣がうなずくと、スツと雪乃は立ち上がった。

「じゃあ、私は帰るわね。私がここにいたら伽羅ちゃん戸惑うでしょ」

笑って言う。

たった二歳しか変わらないのにどこか大人だ。

「正直言って雪乃さんの事とか、もう話したいんだ。蛍の奴も疑問に思ってるし、俺、いつか口滑らしちまいそうで」

「不安？」

まるで子供のように言う蒼衣に、雪乃は笑みをこぼした。

彼女の問いかけにほんの少しだけ蒼衣はうなずく。

「今日みたいな事、いつ起こるか分からない。伽羅を傷付けたくない」

今までこらえてきた思いが自然と言葉になっていく。

まるで姉と弟のような二人。

雪乃は姉のように優しく蒼衣を抱きしめた。

「蒼衣ちゃん、の気持ちとは分かるわ。私だって同じなもの。でもね、蒼衣ちゃんが弱気になったらそれが伽羅ちゃんに伝わっちゃうわよ？それに…」

そこまで言って一度だけ言葉を止める。

そして少しだけ息をつく。

「あの景色が甦ったって事は、引き金になる何かと接触したって事。それもミッション中って事は、^{ターゲット}標的に関係してる可能性が高い。大丈夫よ、きっと近いうちに決着がつくわ」

雪乃は優しくそう言った。

少しずつその声のトーンと口調に蒼衣の不安も消えていく。

髪を撫でる雪乃の手はまるで母親のように暖かった。

「ありがと、雪乃さん。もう大丈夫だよ」

顔を上げて笑顔を見せる。

そして蒼衣の中に、ほんの少し昔の記憶が甦る。

十年前のあの日、蒼衣は今のよう姉に抱きしめられていた。

雨の降る寒い日、幼い二人は恐怖に怯えながら廃工場の片隅でうずくまっていた。

蒼衣は言い知れぬ恐怖の中、温かい姉の腕の中で小さな安心を感じていたのだ。

その記憶の前後をいつも思い出すことが出来ないが、蒼衣はほんの数秒だけの記憶でいつも優しさに包まれるのだ。

「それじゃあ、帰るわね。何かあったらいつでも連絡ちょうだい」

雪乃はそう言うのと玄関のほうへ歩いていった。

見送りに蒼衣も玄関へ行く。

雪乃は笑顔で手を振ると、そのまま帰っていった。

蒼衣は思い出したようにキッチンへ行くと、火を止めてマグカップへコーヒーを注ぎ始めた。

部屋中にコーヒーの香りが広がる。

マグカップを右手に持ち、ゆっくりとソファに座った。

後はまだ残っているミッションを慎重にこなすだけだ。

恐らく今日はこのまま朝まで起きていることになるだろう。

こんな時、伽羅ふと目を覚ましてリビングへ来ることが多い。

その時ここが真っ暗だったら…。

蒼衣はその為に起きているのだ。

伽羅に寂しい思いはさせたくない。

何食わぬ顔をしていても、本心は寂しがり屋なのだ。

初めて会った時からずっと伽羅はそうなのである。

小さい頃からきつとそうだったに違いない。

しかし本人にその頃の記憶はあまりない。

その頃の記憶が引き金になり、封印した過去を思い出してしまう危険性があるため、「R-Z」がその記憶を消させた。

だから蒼衣も詳しくは知らなかった。

だがそれでいいと蒼衣は思う。

伽羅が傷付かずに済むのなら。

そして蒼衣はそつと近づいてくる伽羅の傍にいてやることを選んだのだ。

それが伽羅の一番素直な心だから、と。

蒼衣は静かに瞳を閉じて息を吐いた。

「傷、開くぞ？」

ふと小さな音を立ててドアの開く気配がした。

「起きてたんだ…」

声のする方を向くと、そこには伽羅の姿があった。

ずいぶん早いお目覚めである。

再び伽羅が眠ってから、20分も経っていないはずだ。

「傷、開くぞ？」

蒼衣はそう言いながら、おぼつかない足取りの彼女に手を貸してソファに座らせた。

「大丈夫、このぐらいしょっちゅうじゃない。蛭も大げさだよ」
座る間際傷の痛みを感じたのか、少し顔を歪める。

「その蛭がいなかったら今ごろ出血多量で死んでたかもしれないんだぞ？」

微笑んで蒼衣が言う。伽羅は小さく苦笑して俯いた。

「そつか…。でも私覚えてないんだ。何でこんな怪我したのか、どこにいたのか、何してたのか」

不機嫌に顔を顰める。

蒼衣には、伽羅が思い出せないでいる理由がすぐにわかった。
雪乃である。

ミッシオン中のことを思い出せば、また赤い景色（あの景色）が甦る危険性があるため、ミッシオン中の記憶もデリートしたのだ。何も言われなくても雪乃はちゃんと分かってくれている。

危険因子を見つければ、すぐに取り除いてくれる。

蒼衣はふつと安心して息をついた。

「何か知ってるの？」

不思議そうに蒼衣の顔を覗き込む。

その伽羅がいつもと変わらなくて、蒼衣は伽羅を抱きしめた。

伽羅はきょとんしながら大人しくなる。

いつも優しい蒼衣だが、今はいつも以上に優しい。

嬉しいことには嬉しいのだが、何かあったのかもしれないと伽羅は思った。

「伽羅が無事ならそれでいい。生きててくれればそれでいい」

蒼衣は目を閉じ、そう言った。

温かい伽羅の体温にほっと安心する。

伽羅もまた、蒼衣の声に安堵した。

「蛭はもう寝たの？」

「今何時だと思っ？」

「あ」

伽羅が苦笑して蒼衣は彼女の肩越しに声を抑えながら笑う。

すると伽羅も笑い出した。

穏やかで優しい時間の訪れだ。

「そうだ、ココア飲むか？」

思い出したように蒼衣は立ち上がる。

伽羅は少し微笑んで「うん」とうなずいた。

キッチンへ行きながら、椅子にかけておいたジャケットに蒼衣は手を伸ばし、

「これ、はおつとけよ」

そう言つてパサッと伽羅の肩にかける。

「ありがと」

伽羅は嬉しそうにジャケットをつかんだ。

背の高い蒼衣のジャケットは、伽羅をすっぽり包み込んでしまう。自分には大きすぎるそれは、まるで蒼衣のように温かい。

伽羅はマグカップに注がれるお湯の音を聞きながら、嬉しさのあまり一人で笑ってしまった。

「何笑つてんだ？」

コン

軽く伽羅の頭をマグカップで小突く。

伽羅は頭上のマグカップを受け取った。

手にココアの温かさがじんと伝わってくる。

「幸せ」

伽羅の口からは自然とそんな言葉が出てきた。

その表情に蒼衣の心配も和らぐ。

しかし、それも長くは続かなかった。

「私：なんでこんなケガしたの？」

「え？」

ゆつくりとした伽羅の言葉に、蒼衣ははつと顔を向ける。

やはり気になっていないはずがない。

伽羅の疑問は当然のことだ。

しかし蒼衣は言葉に詰まり黙った。

沈む蒼衣の表情を、伽羅は上目でじつと見つめる。
言いたくない理由があることは、薄々感じていた。

それでもケガが重いために、聞かずにはいられなかったのだ。

「私…失敗した？」

「え？いや」

優しく微笑み返す。

確かにミツシヨンを失敗したわけではない。

どう言えば伽羅を安心させられるのだろうか。

その言葉が見つからない。

するとそんな様子を察してか、伽羅はくすつと笑った。

「ごめんね、ちょっとしたイジワル。蒼衣は優しいから、きつと黙
ると思ったの。私ちゃんと知ってる、どうしてこんなケガしたか」
「！？」

蒼衣の表情は一変した。

「まさか、全部覚えてるのか？」

「ううん、全部じゃないよ。でも私ミツシヨン中に気絶して、腕を
切られて…。そのあとは蛍の声がしてた。それだけ」

「それだけ？本当に？」

「うん。でも目をつぶると真っ赤な景色が広がるの」

伽羅の顔に不安が浮かぶ。

雪乃はうまく記憶を繋げておいてくれたのだろう。

確かにこの方が本人の疑問から生じるリスクの可能性は低い。

しかし蒼衣は伽羅の言う「真っ赤な景色」という言葉に引っ掛かっ
ていた。

「赤い景色って？」

恐る恐る問う。

その記憶がどの程度か分からない。

蒼衣は不安を抱いた。

しかし

「よく分かんないの。ただ真っ赤な印象しかなくて、その中で黒い

影があるだけ。一体何なのか全然分かんない」

伽羅はお手上げといった様子でそう言った。

具体的な記憶でない分少しは安心である。

蒼衣は手元のマグカップを口へ運んだ。

「あのね」

「うん？」

嬉しそうに伽羅が話し始める。

「夢の中で蒼衣に会ったよ。蒼衣が私の手を握ってくれてた。すごくあったかくて、大きかった」

そう言つて、自分の手と蒼衣の手を重ねる。

「やっぱり大きいね」

ひんやりとした伽羅の手が、ぎゅっと蒼衣の手を握る。

蒼衣は静かにマグカップを置いた。

「寒いのか？」

いつもより冷たく感じる伽羅の手を、蒼衣が両手で包み込んで握り返す。

伽羅は小さく首を横に振った。

そしてそのまま蒼衣の肩に寄り掛かる。

「何だかすごく疲れちゃった…」

自然とまぶたが閉じられる。

伽羅の心は安心していった。

蒼衣から伝わる体温が心地いい。

安らいで目を閉じた伽羅を、蒼衣はそつと抱きしめた。

死を感じるほどの恐怖を味わった伽羅の心が疲れるのは当然だ。まるで仔猫のように伽羅は甘えている。

「傷は？」

「傷？痛いよ、ちょっとだけ。でもへーキ」

「我慢するなよ？」

「うん…」

そうつなずくと、伽羅はすぐに眠ってしまった。

「あーあ、風邪引くぞこりゃ」

蒼衣は苦笑すると伽羅を抱き上げ、伽羅の部屋へ運んだ。まるで子供のように熟睡している。

よほど疲れているに違いない。

そして伽羅を見つめる彼自身も、軽いだるさを感じている。

やはり自分も疲れているのかもしれない。

蒼衣は伽羅の部屋を出るとリビングの明かりを消して、自室へ入っていった。

眠いと感じはしないが、眠いのもかもしれない。

ベッドに横になると、体がぐったりしているのが分かる。

蒼衣は静かに目を閉じた。

しかし

ウィー カタカタカタ

突然機械音がし始める。

本部とオンラインでつながっているコンピュータだ。

電子音がすると、コンピュータのディスプレイに映像が映し出された。

「蒼衣、寝ているのか？」

スピーカーから声が聞こえる。

蒼衣はやれやれと起きだして、コンピュータの前の椅子に座った。

「寝ようとしたところだ。何だよ、こんな時間に」

少々嫌そうな様子で蒼衣は答えた。

「ずいぶんなご挨拶だな」

相手は声をあげて笑っている。

「ヤな奴だ。」

今すぐにでもスイッチを切ってやりたい。

「おっと、スイッチを切るのはやめてもらおうか」

「くそ……」

伸ばしていた指を引っ込める。

「それより蒼衣、雪乃から報告を受けたぞ、その後どうだ？」

相手は真面目な口調で問う。

蒼衣の様子も変わる。

「何だよ、優しいじゃん」

蒼衣は不可解そうに言う。

「まるで爆弾を抱えているようなものだろう？」

相手は冷ややかに答えた。

「リスクがでかい。一人のせいでお前達、あの蜚とか言う奴とお前の、二人に負担がかかる。場合によっては失敗もありうる。そうなればいくら国家がバックにあったとしても、それはトップシークレットだからな、助けてくれるとは思えない」

まるで挑発しているような言い方だ。

しかし蒼衣は呆れたように息を吐くだけだった。

蒼衣は分かっているのだ。

この少年「斗希」は、こんな言い方しか出来ないのである。

お互い16歳で、しかも長い付き合いだ、性格もよく分かっている。しかし斗希は、それでも心配しているのだ。

「言っているいい表現と悪い表現があるだろ？…まあ、傷も思ったほどじゃなかったし、全治2〜3週間とどこか」

「そうか。上にはそう伝えておく」

斗希はそう言うと、少し間を置いた。

そして

「退屈じゃないのか？」

ふと、そう尋ねた。

すると蒼衣の心が一瞬だけフラッシュバックする。

が、蒼衣はすぐに我に返った。

自分を直視する相手の目に、蒼衣は昔の自分を思い出したのだ。

「俺は退屈で仕方ない。前線へ行けないのはかなりの苦痛だ。お前もそう思わないか？」

ふう

斗希の発言に思わず溜息が出てしまう。

「別に、そんなことはないけどな」

呆れたように言う。

しかしその表情は穏やかだ。

それに納得できないのは斗希である。

「お前は俺よりいくらかいいさ。前線とはいかないまでも、スリルが味わえる。それに伽羅もいるしな。全く…俺とコンビを解消したのが間違いだっただ」

少々ムキになっているようだ。

不満そうな顔をしている。

蒼衣はそんな斗希を見て軽く微笑んだ。

「二人で前線にいたときは確かに楽しかった気もする。…いや、楽しいって表現は適切じゃないな。言うなら、今以上のスリルがあった。俺もそう思うよ。でも、これでいいんじゃないか？」

蒼衣はどこか遠くを見ながらそう言った。

16歳にしては大人びた横顔だ。

「甘いな。ずいぶんと、甘い…」

まだまだ不服そうな斗希だ。

そんな相手の様子に、蒼衣は声をあげて笑った。

「別に俺は甘くたっていいよ。それだけ人間に戻ってきてるってことだろ」

「お前がそれでいいなら構わないが、それが命取りになることもあるんだぞ？俺達是一般世界では生きていけないんだからな」

念を押すように言う。

「…分かってる。分かってるよ…」

蒼衣は呟くようにそう言った。

そして少年達の真夜中の会話は途絶えたのだった…。

翌朝、一番に目覚めたのは蛍だった。

軽い気だるさの中でキッチンへ足を運ぶ。

バコッ

「えーと」

冷蔵庫の中をのぞくと、先ず真つ先に牛乳パックに手を伸ばす。そして次に玉子に手を伸ばした。

落とさないようにそつと運ぶと、調理台の上へ3つの玉子を置く。開けられた冷蔵庫のドアは勝手に閉まってしまった。

蛭はいつものようにコップに並々と牛乳を注いで、ぐいっと飲み干していく。

朝からいい飲みっぷりだ。

そしてトンとコップをカウンターに置くと、何となく朝の仕度を始めた。

15歳の蛭が得意とするのは、基本中の基本である玉子料理だ。眠っている二人を起こさないように、静かに作り始める。

（昨日伽羅起きてたみたいだけど、大丈夫だったのかな…）

蛭はずつと気にしていたのだ。

目の前で事の全てを見ていたのだから当然といえば当然だ。

やはり何度見ても慣れないものである。

冷静にならなければいけないのに、慌ててしまう。

昨日もそうだった。

蒼衣の携帯番号を呼び出し連絡することさえ、手元が狂ってなかなか出来なかったのだ。

（いい加減慣れなきゃしょうがねーよな、俺も）

蛭は心の中で呟いた。

がしかし、蛭はまだ中学3年である。

普通ならばそうそう冷静になれる状況ではない、無理もないのだ。けれど蒼衣の姿をずっと見てきたせいだろう。

いつのまにか自分もしっかりしなきゃいけないと思い始めていたのだ。

カパッ

器用な手つきで殻が割られ、中身が落とされる。

玉子はフライパンの上でおいしそくに音を立て始めた。

ボタン

その頃蒼衣が部屋から出てきた。

「おはよう、もうすぐメシ出来るよ」

「おはよう、サンキュ。今日はずいぶん早いな」

微笑んで蒼衣が言う。

「蒼衣こそ。寝たの四時ごろだろ？まだ六時半だし、もう少し寝てればいいのに」

「いや、大丈夫だよ。どうせ今日は学校休むつもりだし」

そう言うところ蒼衣は新聞を取りに玄関へ姿を消した。

蛭はカウンター越しに蒼衣の背中を見送る。

「ミッシヨンのことで何かあったのか？」

コトリ

皿を並べながら蛭が問う。

「いや、俺のほうは何もなかったが…、少し気になることがあるんだ。それを調べに本部へいつてくるよ」

蒼衣が答えると、蛭は「そっか」とうなずいて再びキッチンへ戻っていった。

そのキッチンから食器の音が聞こえてくる。

蛭は手際よく準備しているらしかった。

その様子を見て、蒼衣は立ち上がり伽羅の部屋へ行く。

念のため、伽羅を起こしにいったのだ。

伽羅も蒼衣と同じ高校一年で、同じ学校に通っている。

仕事がないときは必ず学校へいくことをモットーとしている伽羅は、例えケガをしていても、一応いくかどうか聞いておかないと、あとで大変なのである。

「伽羅」

とりあえず蒼衣は声をかけた。

ひどく静かで綺麗な寝顔である。

安心して眠っている。

こうなると起こすのも少し可哀想なのだが。

起きる気配はない。

「伽羅、朝だぞ。起きられるか？」

蒼衣はもう一度、声をかけてみた。

しかし反応はない。

ふう

微笑みと共に溜息もこぼれた。

「学校どうするんだ？行くか？休むか？」

「っ！行くっ！」

がばっ

瞬時伽羅はものすごい勢いで飛び起きた。

「…おはよ。じゃあゆっくり支度しろよ」

蒼衣は優しくそう言っ、パタンと静かにドアを閉め、出て行った。
やれやれだ。

学校のことを口にすれば必ず起きると思ってやったことだが、つくづく裏切らない奴である。

しっかりはまってくれた。

「伽羅起きた？」

笑って蛍が問う。

どうやら伽羅の声が聞こえたらしい。

「ああ、学校も行くって言ってるよ」

「寝てるとは言わなかったんだ？」

「はは。まあ言っても聞きやしないだろうから」

苦笑混じりに蒼衣はそう言った。

そしてテーブルの上を見ると、すっかり朝食の用意が整っていた。

二人だけで先に朝食を食べ始める。

すると蛍が口を開いた。

「あのさ、昨日の事だけど、俺あんまり気にしてないから。追求もしない。そりゃ全然気になっってないワケないけど、でも蒼衣はいつも嘘なんていわないから。だから蒼衣が話せる時が来るまで、待つてるよ」

そう言った蛭の表情はいつもの明るさに満ちていた。

それを見て蒼衣も内心ほっとする。

「分かった、ありがとう」

「うん」

蛭は満足そうにうなずいた。

それからすぐに制服に着替えた伽羅が機嫌よくやってきた。

どうやら腕を吊っていた布は巻けなかったようだ。

蒼衣はすぐにそれに気付き、伽羅の肩から腕に布をかけて、怪我した腕を吊れるようにしてやる。

「ありがと、一人じゃ出来なかったんだ」

伽羅は言う。

「そういう時は言えよ。何でも一人でやろうとすると、怪我の治りが遅くなる」

「はい」

伽羅は何故かご機嫌だ。

「あれ？そういうえば蒼衣、まだ着替えてないの？」

「今日はちよつと用事があるから、自主休校」

「え？…」

一瞬だけ伽羅が不安そうな顔を見せる。

「どうかした？」

蛭が問うと

「ううん、何でもないよ。いただきます」

そう言つて、いつも通り朝食を食べ始めた。

この時既に事は始まっていたのだ。

小さな歯車の破片かけらがほころび始める。

太陽は窓から光を流し込んだ。

そして少年達の心は揺れる。

重い鉛の形となって……。

Stage 2

午前9時、蒼衣は既に本部ビルに到着していた。

自動ドアを通り抜けると、一見エレベーターのドアのようなところへ立つ。

すると、ピーと電子音が鳴り、扉が開くと、蒼衣は中へ入った。

「虹彩一致。声紋を照合します。お名前をどうぞ」

電子音が告げる。

「新堂蒼衣」

「コードナンバーをどうぞ」

「1985415」

「シークレットコード01 声紋及びコードナンバー一致。目的地をどうぞ」

「総合検索室」

「了解」

ウィーン

扉が閉まり、エレベーターが動き出す。

このエレベーターは侵入者を防ぐために作られたのだ。

電子音に従い答え、全て一致すると目的地を告げるだけで、その部屋があるフロアまで連れて行ってくれる。

便利なものだ。

「到着しました」

プシュー

電子音が告げると扉が開いた。

蒼衣は真っ直ぐ目的地へ向かう。

「蒼衣君？」

背後から声が呼びかけた。

「あ、白川さん！昨夜はありがとうございました」

蒼衣がそう言うと、蒼衣を呼び止めた秀麗な人物、白川麗はにつこ

りと微笑んだ。

そう、昨夜ワゴン車で駆けつけてくれた人物である。

「R-Z」では男として生きている。

しかし実は女性であることを、蒼衣は知っていた。

だが本物の男性よりもかつこいいたため、周囲に女性であるというこ
とはばれていないようだ。

麗は書類を抱えながら蒼衣と歩き出した。

「総合検索室？」

麗が問う。

「はい、ちよつと気になることがあつて」

「それは伽羅ちゃんのことかい？」

そう問われ、蒼衣は黙つてうなずいた。

「そうか…。そういえば、もう斗希君には会つた？」

「いえ、別に用もないし」

そう答えると麗は苦笑した。

相変わらずな二人だと思う。

ずっと以前もこんな感じだつた。

それは二人が前線を退いた今も変わっていないようだ。

同じ関係や距離はずっと保たれている。

そんな感じが麗には嬉しかった。

「君達は変わらないな。嬉しいよ、君達の関係が切れていなくて」

麗は優しく言う。

その言葉は蒼衣にとつて、嬉しい言葉だ。

「斗希の奴、ずいぶん退屈してるみたいですね。グチってましたよ」

「だろうな」

そう言つてクスクスと麗は笑う。

そんな表情はどこか穏やかで、蒼衣の記憶で立つた一コマだけ残つ
ている母親にどこか似ている。

もちろん記憶に残っている母親の顔と似ているわけではない。
空気が似ているのだ。

「それじゃあ私はこつちだから。気になる芽は今のうちに摘んでおいた方がいい。じゃあ」

そう言つて颯爽^{さうそう}と立ち去つていく。

その後姿を蒼衣は見送った。

（かつこいいいな…）

思わずそう思つてしまう。

そんな自分に苦笑して、蒼衣は再び歩き出した。

そして検索室へ入つて行く。

中にはいくつものコンピュータが並んでいた。

しかしそこには座らず、さらにその奥に見える扉の方へ入つて行く。扉の横にある数字盤にシークレットナンバーを打ち込むと、ガチャリと取っ手の鍵が開かれた。

この部屋は限られた者だけが入れる場所なのだ。

「R-Z」本部にある上層部のコンピュータに直接アクセスできるのである。

蒼衣はその部屋に入ると、一番奥にあるコンピュータの前に座った。席には「1985415」と書いてある。

そう、蒼衣のコードナンバーだ。

どうやら席は指定になっているらしい。

蒼衣はすぐにアクセスし、伽羅たちの今回のターゲットに関する資料を引き出した。

今回蒼衣は別に指令^{オーダー}が来ていた為、伽羅たちのミッションについては何の関知もしていなかったのだ。

その上もちろん現場にも居合わせていない。

伽羅の負傷を聞いて駆けつけはしたものの、それどころではなかったから、死体の顔を確認することも出来なかった。

資料を見るだけならマンションにいても出来たのだが、伽羅に疑問を抱かせないためにここへ来たのである。

今回は慎重すぎるくらいがちょうどいいのだ。

それに蚩^{おこな}と伽羅はいつものように仕事を分担して行っていた。

ターゲット
標的たちの顔の確認は蛭が行ったはずだ。おこな

顔写真の資料は恐らく蛭が持っている。

もし伽羅が気絶したし理由が標的達だとすれば、伽羅が知らずにいたのもうなずける。

蒼衣は慣れた早い手つきでコンピュータの画面をくるくる変えていく。

タンッ

一度マウスをクリックした。

そこで手が止まる。

「あつた…っ！」

ディスプレイには見覚えのある顔が一つ、映っていた。

「田所…？」

聞き覚えのない苗字に変わっている。

確か3年前に伽羅を助けた時は「斎藤」だったはずだ。

その時は別の人物が標的だったせいで、この人物には一足先に逃げられていたのである。

恐らく田所は、あの時の標的だった組織の中でもトップの方にいた人物だ。

しかし考えてみればおかしい話だ。

なぜ「R・Z」は3年もの間この人物を生かしておいたのだろうか。まさか伽羅に知らず知らずのうちに復讐をさせようとも思っていないのだろうか。

しかし指令は伽羅達の所へきたのだ。

偶然と思える人選ではない。

どちらにしても、もうこの人物は「暗殺」された。

が、問題が一つ残っている。

もしかしたらこの人物が、伽羅の存在を誰かに伝えてしまったかもしれない。

これは簡単に片付きそうなヤマではない。
組織ぐるみだ。

厄介なことになりそうである。

蒼衣は椅子の背もたれに寄り掛かり、ふと伽羅のことを思い出した。今ごろ伽羅は何をしているのだろう。

傷は痛んでいないだろうか。

蒼衣が伽羅に出会ったのは3年前、伽羅を助け出した時である。

あれから蒼衣はいつも伽羅の近くにいた。

伽羅が訓練生になってからも、時々様子を見に行っていた。

そして本来ならばランクの違う「狩る者」^{ハンター}同士ではチームを組むことが出来ない中で、蒼衣は「現場教官」として伽羅と蛭の三人でチームを組み、今に至る。

「R・Z」組織内ではハンターはSランク、Bランクに分けられ、蒼衣はSランク、伽羅と蛭はBランクに属していて、本来ならば蒼衣は伽羅達とは違う特別な世界にいた。

そしてその扱いもまた特別だ。

しかし、だからこそこうして適当な理由をつけて同じチームにいられるのだが。

それもSランクハンターにだけ与えられた特権というやつである。

蒼衣はSランクハンターとして、前線ではないが、時々個人的な指令も受けていた。

今回もそうだ。

伽羅達とは別に、個人的な指令を受け、任務を遂行していた。

その間に、事件は起きていた。

蛭も伽羅も、もう新人の域は脱している。

だから蒼衣は二人に任せただの。

ところが。

誰も予想などしていなかった。

3年前、あの事件に黒幕がいることは知っていた。

しかし、R・Zの上層部はその黒幕「暗殺」指令までは出さなかったのだ。

まだあの時点では早すぎたのだ。

それが今、また新たな事件を引き起こしている…。

このままもし黒幕が動き出せば、伽羅が危ない。

これは恐らく伽羅たちのランクで片付けられるような事件ではないはずだ。

片付けられるとすれば、今前線にいるハンターぐらいだろう。

でも。

それも危うい。

今現在蒼衣たちの後任で前線にいるハンターはいないのではないか。蒼衣の記憶には後任が就いたという知らせはなかったと思う。

R-Zはどうするのだろう。

もし伽羅の存在が表に出てしまえば、組織としての存続自体危ぶまれる。

そんな馬鹿なこと、R-Zが許すはずないとは思っけれど。

以前よりずっと平穏な日々が、少しずつ変化している。

蒼衣は薄々感じていた。

もしかしたら、もうすぐこの日々が壊れていく…。

蒼衣の不安は積もるばかりだった。

その頃、伽羅は数学の授業を受けていた。

しかし神経は別のところに集中している。

ハタから見れば真剣に授業を受けているように見えるため、教壇に立ち説明が続いている教師が伽羅を注意する事はない。

おかげで心はすっかり昨日の出来事に集中していた。

あの「赤い景色」のことである。

真っ赤な景色の中で、黒い影がいくつも動く。

それもはつきりした影ではなく、ぼんやりとした影だ。

あの時伽羅は言い知れぬ恐怖の中にいた。

気付くとどこからか蒼衣の声がした。

だから伽羅は必死に蒼衣の手をつかんだ。

けれど。

その前の記憶が問題だ。

自分は一体いつ気を失ったのだろう。

ミッション開始は午前一時。

蛭と伽羅は倉庫内の物陰に隠れていた。

倉庫の扉が開き、蛭が暗視スコープで標的の顔を確認すると、二人はすぐさま動き出した。

訓練生を終えて2年の蛭と伽羅の元に来る指令はBランクの仕事である。^{オーダー}

そうそう難しいものではない。

二人の動きは迅速だった。

あっという間にその場にいた標的たちを倒し、伽羅が最後の一人を仕留めようとした時、その時…。

伽羅の記憶はそこで途切れていた。

全く、思い出せない。

最後に倒そうとした標的の顔も、ぼやけていてはつきりしない。

そして伽羅は夢の中にいて、目を覚ますと自分の部屋にいて、リビングへ行くと蒼衣が起きていてくれた。

夢の中にいた自分は、確か小学生ぐらいだったような気がする。

何故あの景色の中で自分は幼くなっていたのだろう。

そういえば、R・Zに入ってから記憶も、初めの頃はあやふやだ。はつきり思い出せるのは、訓練生になった頃からである。

その前は。

はつきりと思い出せない。

どうしてR・Zに入ったのかも覚えていない。

ただ覚えているのは、自分には人の心を読んでしまう不思議な力があつただけだ。

自分はずいぶん変な力を持っていると思っていたが、蒼衣はもつとすごかった。

心が読めるだけでなく、念動力なんぞという力まで持っていた。それを知ってだいぶん心が楽になれたことも覚えている。

しかし、12歳ごろの記憶は何度やっても思い出せない。

そういえば、蒼衣と出会ったのもいつだっただろう。

自分が訓練生だった頃、すでに蒼衣とは仲が良かった。

すでに訓練生を卒業していた蒼衣は、時々顔を出してはよく伽羅の訓練に付き合ってくれていた。

そうだ、自分の中にある記憶にはいつのまにか蒼衣がいて、気が付くと自分はR-Zにいた。

蒼衣との出会いも覚えていない。

となれば、蒼衣と出会ったのは13歳より前ということになる。

しかし他の全ての記憶がないのに、何故蒼衣の事は覚えていたのだろうか。

それとも、あの頃何度も顔を合わせていたから、どれが出会いたったか忘れてしまっているのだろうか。

大切な人の事なのに、何故こんなにも記憶はあやふやなのだろう。

思い出そうとすればするほど、考えれば考えるほど伽羅の気持ちは沈んでいく。

これも久々にした大ケガのせいだろうか。

ふつと伽羅は右腕を見やった。

「伽羅、腕痛むの？」

「！？」

友人の声に驚き、伽羅は顔を上げた。

そこには安心できる笑顔だ。

伽羅の親友、水上奈緒である。

「もう授業終わってるよ。でも伽羅全然動かないから…」

「ごめん、考え事してた。傷は痛まないから大丈夫」

そう言っつて伽羅は苦笑する。

「元気ないね」

奈緒は空いていた隣の席に腰掛ける。

唯一無二のこの親友は、詳しい事は分からなくともその様子は全てお見通しだ。

考え事もずい分深刻だとすぐに分かる。

「伽羅、溜め込んだんじゃダメだよ？私じゃなくても、誰にでもいいから話せる人に話したほうがいいと思うんだ」

「うん…」

伽羅はうなずく。

決して押し付けがましい言い方をしない奈緒の優しさが心に響く。しかしその優しさが苦しい。

全てを明かすわけにはいかないから、話すとなれば向こう側の見えない不透明な話を聞かせることになってしまう。

例えそれでも奈緒は自分の事のようにきちんと聞いてくれるだろう。でもそれではどこか奈緒を裏切っているように感じてしまうのだ。

話せない。

そんな事を考えている伽羅を見ていた奈緒は、

「伽羅の場合は話せない、のかな」

そう言った。

びくっ

伽羅は奈緒の言葉に目を丸くした。

しかし奈緒は笑顔である。

「大体想像は付くよ。話せない、って言うのは話したいけど話せない、ってことでしょ？だから話せない事は話さなくてもいいんだよ。無理に話そうとすると余計苦しくなっちゃうから」

「奈緒…」

心の奥が締め付けられる。

「今日の伽羅は少し弱ってるのかな？気晴らしに買い物でも行く？もちろん放課後だよ」

奈緒は伽羅の顔を覗き込んだ。

出そつになる涙を、伽羅はぐっと堪える。

「奈緒、ありがと」

「ん？どういたしまして。放課後になったらデパート行こうね」
「うん」

「荷物はコインロッカーに入れて、買った物は私が持つから伽羅は遠慮しないでね」

「うん」

「大丈夫、伽羅は一人じゃないから」

「うん」

伽羅は嬉しそうにうなずいて笑った。

何故だろう。

奈緒の言葉はこんなにも自分を楽にしてくれる。

確かに自分は今一人ではない。

蒼衣も蛭も、そして奈緒もいてくれる。

しかし、やはりこのあやふやな記憶が気になる。

疑い始めると自分の名前すら疑いたくなるのだ。

本当に自分の名前は「伽羅」なのだろうか。

伽羅の中に芽生えた疑問は消えはしなかった。

あれからすぐに総合検索室を出た蒼衣は本部ビル内を歩いていた。

他に何の目的もないが、もしかしたら斗希に会えるかもしれないと

思っていたのだ。

ただし、奴にその暇があればの話だが。

「お前も忙しい奴だな、蒼衣」

「斗希!？」

驚いた蒼衣は声のしたほうを向いた。

本当に斗希という奴は神出鬼没だ。

一体いつから待ち伏せていたのだろう。

「お前はずいぶん、暇そうだな」

蒼衣はそう言ってやった。

「暇とは失礼な。それでも仕事は朝から晩まで詰まりっぱなしだ。

次にこの仕事につく奴が気の毒だ」

斗希は余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）でそう言い放った。

「斗希、次って…もう後任は決まってるのか？」

蒼衣が問う。

そう、先が見えていなければ「次」などとは言えないはずだ。しかもこの余裕だ、そう遠いことではないらしい。

「相変わらずいい読みだ。もちろん後任はすでに決まっている。今は引継ぎ中だ」

「それならお前の次の仕事は？」

何気なく聞いた問いに、

「最前線だ」

斗希は鋭い視線を向けてそう答えた。

瞬時蒼衣の表情が変わる。

斗希がここで待ち伏せていたのはそれを告げるためだった。

蒼衣が来ている事を知っていたのだ。

「俺は最前線へ行く。いや、戻ると言っただ方が正しいか」

「上からの命令か？」

「他にどこから命令が来る？」

「…」

蒼衣は少しの間黙り込んだ。

しかし

「良かったな。これで退屈じゃなくなるだろ」

無理矢理作った笑顔でそう言った。

内心は信じられないままだ。

もしかしたら自分も…、それを考えてしまう。

けれど斗希から出た言葉は、蒼衣の気持ちを裏切ってはくれなかった。

「他人事ではない。前線へ行くのはお前と俺の二人だ…」

お前と俺の二人…その言葉が耳の奥で響き続ける。

斗希は蒼衣の様子をじっと見つめていた。

「何故俺達が前線から外されたか分かるか？」

静かに斗希が問う。

「俺達に落ち度は一つもなかった、俺達が不必要になったからでは

ない。むしろその逆。俺達の力を蓄えるために前線から外したんだ。3年という時間はその為に充分だった。これ以上Aランク指令オーダーに甘んじていることはない。そのうち上から呼び出しがかかるだろう」

斗希の言葉を蒼衣はじつと聞いていた。

「お前は、前線へ行くのが嫌なのか？」

「…いや、そうじゃないけど…」

「一般社会に多少の夢を見た、か」

「…」

違う。

夢を見ることなどつくに忘れた。

夢を見ていられるほど、この世界は甘くない。

それは蒼衣も分かっている。

何故前線から外されたのかも、薄々分かっていた。

あの頃の自分には能力の低下などではなく、むしろ調子は良かった。

しかしやはり3年という時間は長すぎたようだ。

Aランク指令はSランク程ハードではない。

それでもBランクと比べればその差は歴然だ。

例え指令のランクが下がろうとも、自分はSランクハンターに属し

たまま、相変わらず裏の世界で生きている。

しかし前線にいた頃に比べればずっと穏やかだ。

そして蒼衣の周りにはいつも伽羅と蛭がいる。

斗希と同じように大切な仲間だ。

けれどその感情が危険なことも知っている。

R・Zは生き残ることが第一なのだ。

パートナーはお互いの暴走を止めるためのものであって、仲間意識を育てるものではない。

それは分かっている。

「お前は前線へ行くのが嫌なのか？」

もう一度、斗希は問う。

「嫌、別に行きたくないわけじゃないさ。ただ自分でもわからない。

3年は：長すぎたかもな」

そう言つて蒼衣は黙り、近くにあつたソファに腰を下ろした。その隣へ斗希も座る。

あの頃よりもずっと平和で穏やかな日常：確かに蒼衣は浸っていた。中学、高校に通い少なくとも昼間は表の世界に生きている。しかしそれは表面的なものだ。

本当の日常は奥深くに隠れている。

表の世界を夢見ても、全てを手に入れることは出来ない。もうとつくの昔に解つていたはずだ。

なのに何故、こんなにも今ショックを受けているのだろう。昔の自分なら、こんなショックは受けなかっただろうに。

「気がのらないならやめた方がいい、失敗するぞ」

斗希はそう言つた。

言葉は冷たいが、決して突き放しているような口調ではない。

失敗の先にあるのは「死」のみなのだ。

それも前線となれば必至である。

解っているのだ、蒼衣も。

そして斗希の真意も分かっている。

「お前に迷惑はかけない。けどさ、純粹にスリルなんて楽しめるか？俺もお前も」

小さく微笑む。

そんな蒼衣を斗希はスツと見つめた。

「そうか？俺は退屈だった分、存分に楽しませてもらうが」

「なら、いいかもな」

「：昔に戻ればいいことだ。銃ガンを持てばすぐに思い出すんだろう？今だって。いいか、俺達はレッド・ゾーンのぎりぎり一歩手前で生きている。完全な闇だ」

斗希の言葉はずしりと響く。

すると蒼衣は静かに笑つた。

「いまさら白になれるわけないだろ」

「分かってるじゃないか。だったら躊躇う理由はどこにもない。そうだろう?」

「ああ、…けど俺だって人間だ。躊躇うことがあってもおかしくないだろう?」

蒼衣はうつむいてそう言った。

「人間?くだらない情は捨てた方がいい」

「え?」

「情を持ったままだとお前はいつか壊れる」

斗希の視線が蒼衣の心を射通すかのように冷たく刺さった。

「お前は前線を退きあの二人とパーティーを組んだことで仲間を得た。しかしそれと同時にくだらん仲間意識が芽生えた。あの二人をお前が守らなければいけない法なんてどこにもないのに、だ」

「それじゃ仲間を、パートナーを見捨てろってことか?」

蒼衣は声を殺したようにそう言った。

斗希の視線を直視できない。

「俺達は昔の忍びと同じだ。忍びは任務遂行のためには仲間をも見捨てる。生き残ることを優先させ、次へつなげるためだ。俺達は生き残ることを前提に仕事をするんだ。パートナーを組むのは、暴走を防ぐためであって馴れ合うためでも仲間意識を育てるためでもない。この世界はそんな生易しいところじゃないぞ」

斗希は始終冷静な口調でそう言った。

仲間やパートナーのいる理由は蒼衣も充分分かっている。

しかしそこには割り切れない何かがあった。

「斗希：お前はそうやって全ての事を割り切っていけないのか?生活自体に裏表があって、その中で葛藤とかないのか?仕事といえど俺達は一瞬でなんの躊躇いもなく人を殺すんだぞ?そんな自分が表に立った時、明らかに周りとは違うこと、嫌でも感じるだろう?」

いつになく激しい口調だった。

自分の中の裏と表。

心の中の葛藤は消えない。

二人の間には重い沈黙が訪れた。

静寂にも似た長く重い沈黙。

それを破ったのは斗希の一言だった。

「甘いな」

そう言つて斗希が立ち上がる。

それにつられて蒼衣も顔を上げた。

「裏に身を置くから表が辛い。表があるから余計な葛藤が生じる。そしてお前は壊れる」

「何だよそれ…」

「本当のことだろう？そしてお前が壊れればお前のパーティーはもろく崩れる。それならいつそのこと表を捨てて裏へ来たらどうだ？」
斗希は静かにそう言つた。

蒼衣には斗希に返す言葉が見つからない。

まるで大人にたしなめられている子供のような気分である。

「正式な命令が来るまでにまだ時間がある。割り切れないのなら今のうちに二人を自分から切り離すことだ。そうすれば先ず最悪の事態は避けられる」

「同じことだろ？あの二人を切り離してもお前がいる」

「俺のことは気にしなきゃいい」

「そんなことできるわけないだろっ」

苦しきで声が詰まる。

蒼衣にはどんなことをしても斗希のように割り切ることは出来ないのだ。

「蒼衣、少し冷静になれ。今のお前じゃ前線へ行つても殺られるだけだ。使い物にならない」

斗希にそう言われて、蒼衣の様子も少しずつ変わっていく。
少しだけ落ち着いたようだ。

「俺達は生き残ることを優先させるといったらどう？それは一人よりも二人で生き残れる方がいい。パートナーはそのためでもある。俺達と忍びは似て非なるものだ」

「…？それって、お互いを助けるためってことか？」

「そうだ。ただしそれにはお互いの高い能力が必要とされる。どちらかが劣っていれば不可能だ。つまり、俺と組むことに至っては二人で助かることも可能だ。が」

「あの二人とでは、三人で生き残ることは難しい…」

「ああ」

落ち着いて呟いた蒼衣に、斗希は静かにうなずいた。

「俺達は誰かがやらなきゃいけないことをやっているだけだ。蒼衣、相手への情は捨てる。相手への情がある限り、お前の中の罪悪感が消えない」

どこか温かい斗希の声。

伽羅も蛭も蒼衣にとって大切な仲間だ。

蒼衣の居場所は確実にそこにある。

けれどあの二人にはまだ蒼衣を100パーセント理解する事が出来ない。

斗希なら自分の事のように分かってしまうことでも。

そう、戻るだけだ。

昔に戻るだけのことなのだ。

蒼衣の居場所はここにもある。

「斗希、正式に指令が来たらすぐにこっちへ移る。手配は頼んだ…
パーティーは解消だ…」

とても落ち着いた安堵の顔でそう言った。

傷を負った伽羅の事も気がかりだし、まだまだ子供の蛭も心配だし。

道が変わる、とてつもなく大きくて、とてつもなく小さな交差点。

蒼衣は向こう側へ渡る信号を青に変えた。

もう戻れない。

信号は赤に変わる。

もう…戻れなくていい。

蒼衣の言葉に、斗希はそうかとうなずいた。

そして蒼衣の元に前線行きの指令が下ったのは、それから一週間後のことだった。

Stage 3

すっかり片付けられた部屋の扉をパタンと閉めた。
もう帰ることはないかもしれない。

荷物はすでに移してある。

後は蒼衣が行くだけだ。

外では斗希が待っている。

「蒼衣…」

蒼衣は振り向いた。

見ると伽羅が後ろに立っている。

そのまた後ろには蛭だ。

「蛭、これからもがんばれよ。焦ることなんかない、少しずつ成長すればいい」

「うん…。蒼衣、絶対いつか追いついてみせるよ、俺
明るく笑ってそう言う。」

「待ってるよ」

蒼衣は一つ微笑んで見せた。

そして伽羅のほうへ向き直る。

伽羅は心細そうな瞳で蒼衣を見つめていた。

「傷、大丈夫か？」

「うん。もう平気」

「学校は？」

「大丈夫」

「…」

何をどう言えばいいか分からない。

蒼衣の頭の中をいくつもの言葉がぐるぐると回り始める。

「蒼衣」

いつもより少し高い声で伽羅が呼びかけた。

「一つだけ約束して？」

「ん？」

「死なないで。絶対」

真っ直ぐ、ただ蒼衣だけを伽羅は見つめる。

「ああ、死なないよ俺は。そうカンタンに死ぬわけないだろ？」

そう言つと、ぎゅつと伽羅を抱き寄せた。

「私、大丈夫だよ。一人じゃないからがんばっていける。学校でも今まで通りでいられる。信じてるから、私がんばる。…また、会えるよね？」

「会えるよ、どこかで」

「うん…。またね」

「うん」

そう言つて二人は離れると、蒼衣は少しだけ微笑んで玄関を出ていった。

振り返らず、伽羅の一筋の涙を見ないように。

階段を駆け下りると、斗希が黙って待っていた。

腕を組んで、いつものように。

そしてその横には以前斗希と蒼衣の補佐役サポーターをしていた山神信司の姿もある。

山神は薄茶色のスーツを着こなしていた。

長身にそのスーツがぴたりと似合う。

3年ぶりに復活するのだ。

R-Zきつての天才コンビ、そしてその二人をサポートしてきた有能補佐役ポーター。

3人は車に乗り込んだ。

山神が車を発進させる。

「もう覚悟はいいのか？」

「ああ、この一週間で全部どうにかした」

蒼衣はほんの少し苦笑する。

運転席では山神が静かに二人の会話を聞いていた。

けれど斗希と蒼衣の間にも沈黙が訪れる。

元々放っておいてもうるさいくらいに話をするようなコンビではなかった、山神はそんな事を思い出す。

確かコンビを組んだ当初は二人とも全く会話がないといってもいいくらい、何も話さなかった。

それでいて何故かばつちり息が合っていたのだが。

すっかり車内は静まり返ってしまった。

蒼衣の中では何度も伽羅と蛍の姿が蘇る。

仲間は馴れ合うためのものではない。

情を育てるためのものでもない。

生き残るための術…。

それは分かっている。

けれどこの辛さは割り切っていけるものばかりではないことの証拠だ。

どうしても割り切ることが出来ない。

そこまで冷酷な人間にはなれない。

自分が生き残るためには見捨てる、そんな存在には出来ない。

「また難しいことを考え込んでいるのか？」

斗希が問う。

「俺には難しいな。どうにかしたって言ったって、そうカンタンに割り切れない」

「割り切る必要もないだろう」

運転席の方から声がした。

山神だ。

「例えば紅橋君たちだ。彼らは助け合って生き残るタイプだ。決してお互いを見殺しにはしないだろうな」

「あれは例外だと思うが？」

斗希が言う。

紅橋、とは雪乃のことである。

確かにそう言えない事もない、蒼衣は心の中でうなずく。

山神は苦笑していた。

「例外かもしれないけど、R・Zは例外で成り立ってるようなものだからな。それに何だかんだ言っても君だって、土壇場になれば蒼衣君を助けようとするだろ？」

斗希の方をちらりと見て山神が言う。

「お互い助かる可能性があるからだ」

口ごもりながら斗希も反論する。

「可能性はあくまでも可能性だ。確実なものはないだろう？それで
も君は蒼衣君を助ける」

という山神に、斗希はぐつと詰まった。

「まあ、そうは言っても可能性っていうのは大切だからな。可能性
がなければ助けない、か」

「万が一にも可能性が0になることはない。だから俺は蒼衣を助ける」

その自信はどこからくるのか分からないが、自身満々でそう言った。
二人のやり取りにどこか安堵する。

「人間なんだ、情なんて自然と生まれる。その中でいつも試される。
かたくなにオキテを守ろうと勤めるのも一つかもしれない、生き残
るためにはね。けどそんな事は決して重要じゃないんだ」

「どうしてですか？」

蒼衣が問う。

「万に一つも君たちが失敗することは有り得ないからだよ」

これまた自信満々に山神は言った。

斗希も山神も、その自信の根拠はどこにあるのだろう。

「君達には絶対の信頼があるからね、そうじゃなかったら君達の能
力を温存したり、また最前線に戻したりなんてしないよ。それに君
達は何のために僕達サポーターがいるか知ってるかい？」

その問いに、後部座席の二人は黙る。

補佐役については二人ともよく知らないのだ。

ただの雑用でないことぐらいは想像もつくが。

「補佐役は命を賭けてでも狩る者ハンターを守るといふ役目があるんだよ」

「え？」

「驚いてるようだね。無理もないか」
そう言つて苦笑する。

「R・Zは厳しいところだ。それは君達にも分かるだろう。けどまだ君達はRED・ZONEの一步手前にいるんだ。ギリギリのところだね」

「最前線であつてもですか？」

「そう。本当のRED・ZONEは補佐役を必要としなくなつてからだよ。普通なら僕や白川君のように大人になつてからだけど、君達はもつと早いな。このままいけば一年以内に僕は必要なくなる。そうなれば僕はデスクワークのみの補佐役になれる」

山神はどこか嬉しそうにそう言つた。

蒼衣と斗希は顔を見合わせる。

今まで知らなかったことばかりだ。

もつとも、今までは自分達が幼すぎて、自分達を取り囲む大人たちの事情なんてどうでも良かった。

しかし補佐役に、そんな使命があつたとは。

「R・Zで生き残るには、どんなことがあつても生きること諦めないことだよ。特に君達はね」

「けど…、山神さんの話を聞いてると、あのままパーティーを解消することもなかったんじゃないかって思えてくる。割り切る必要がないなら尚更」

蒼衣はそう言う。

斗希も隣で耳を傾けていた。

「それがそもいかないんだ」

山神の表情が変わる。

今までの和やかさが消えていた。

「こうまでして君をこちらへ迎えるのにはきちんと理由があるんだ」
「その理由って？」

蒼衣は身を乗り出す。

「うん、先ず連絡に不便なんだ、君達二人が離れた場所にいるとね。そして何かとトップ・シークレットが多いから、君達以外に情報を知られると困る。それから、特に蒼衣君、君にかかる精神的負担を余計にかけるわけにはいかないんだ」

「分かるだろう？お前は俺と組むことで最大限に能力を発揮できる。けれどあのままでは他人の分までお前に負担がかかる。そんな状態で最大の力は出せない」

斗希がじつと蒼衣を見据えながらそう言った。

あのままではそう、伽羅と蛍の精神的未熟さが蒼衣に負担をかけてしまう。

凶星だ。

そして山神が続ける。

「そして重大な問題が起きた」

「問題？」

蒼衣が問う。

「君に与えられた特権は、ここまでだって事だ。上層部は今まで君の行動を甘く見ていた。しばらくの間は自由にしておけ、ってね。」

ところが君達の力が必要になって、君を自由にさせておくわけにはいかなかったんだよ」

「俺達に与えられた特権なんて、そんなものだ」

蒼衣は二人の話を黙って聞いていた。

Sランクハンターに与えられた、「特権」。

今まではそれに助けられていたと思っていた。でもそれは違う。

「特権」は、上層部の気まぐれだ。

そんな事を考え出した蒼衣を見て、山神は「全て情報は手に入れられる。伽羅君達の事は気掛かりかもしれないが、少しの間の我慢だよ。いずれ決着がつく」そう言った。

「決着？…てことは、もしかして今回の仕事って…」

「そう、3年前の件を全て片付ける」

はつきりと山神はそう言った。

3年前の件、それは伽羅の両親が殺された事件である。

「赤い景色」として伽羅の記憶に残っている事件だ。

「それならその仕事が終われば俺は」

蒼衣は呟いた。

しかし。

「パーティーを戻すことは無理だ」

「どうして？」

「元々Sランクハンターとそれ以下からのハンターでは全く扱いが別なんだ。本来なら前線を一時退いたとしても、Sランク以外のハンターと組むべきではなかった。けれど伽羅君も蛍君も特殊能力を持っていたから、君にその力を育ててもらう必要があった。でもこれは特例だ。君が前線へ戻ったからにはもう世界が違う。接触すら制限される」

その言葉に蒼衣は言葉を失った。

ランクは違えど同じハンターだというのに世界が違うとは。

「心配かい？」

和らいだ声で山神が問う。

山神は蒼衣のことも斗希のことも全てお見通しだ。

何と言っても二人が小学生の頃からずっと、山神は二人を見守ってきたのだ。

二人の性格はしっかり把握している。

「彼女達の情報なら知ることが出来る。そんなに心配は要らないよ」

「それに全く接触してはいけないとは言っていない。制限されるだけだ」

斗希が付け足す。

すると、少し蒼衣の心も軽くなる。

「R-Zは一見完璧で、その網からは抜け出せないような気になるけど、ちゃんと逃げ道はあるんだよ。特にSランクハンターにはそ

れが特権で形になって表れる。難しく考えない方がいいかもしれないな」

「そっか。それならいいや。だいぶ気分も楽だし、絶望はしなくて済みそうだ」

蒼衣は明るくそう言うと、背もたれに寄りかかった。

どんなに考えても、やはりすっぱりと割り切ることなんて出来ない。それでも山神達の言葉で少しは心に余裕も出来た気がする。

それに今回の仕事を終えれば伽羅の身の安全も保障されるのだ。とつと片付けてしまいたい。

蒼衣はそう思った。

サーッ キュッ

シャワーの蛇口を閉める音がして、水の音が止んだ。

付けっ放しになっているテレビから流行の歌が聞こえてくる。

時々音程を外す下手な歌声…。

どうしてあんなものが流行るのだろうか。

流行とは怖いものだ。

服を着替えてバスルームを出ると、彼女はすぐ台所へ入っていった。紅橋雪乃、そう伽羅の記憶が戻りかけた時助けに来た、あの雪乃である。

今年19の雪乃は、少女のようなあどけなさも消え、整った顔に細身の体が大人の女性を演出している。

蒼衣がR-Z本部に戻ってから、すでに三日が過ぎていた日の事だった。

ここは雪乃とそのパートナー、渡瀬修一の住むマンションである。

修一は今年23の大人で落ち着いた雰囲気を持つ。

この日雪乃はどうやら一つ仕事をしてきたようだった。

この二人はAランクに属している。

あらかじめ熱いお湯を通して入れておいたコーヒーを、雪乃はゆっくりカップに注いだ。

部屋中にコーヒーのビターな香りが漂う。

「ふう。やっぱり仕事の後はシャワーにコーヒーだわ。まったくやんなっちゃう。何で突然あんな指令オーダーが来るのかしら」
グツ

雪乃はソファに力が抜けたかのように座った。

「仕方ないな。お前の能力は団体相手にはもってこいなんだから」

「それはそうなんだけどね。でも今回の仕事、本当にAランクなのかしら。全然手応えのない奴らばかりだったわよ」

「それはお前が強すぎるからだろう？」

修一はそう言つて、ゆつくりと分厚い本を閉じる。

雪乃は手に持っていたコーヒーを一口飲んだ。

「私なんかより強いボーヤ二人がいるじゃない。きっと今頃暇にしてるはずよ？」

「けどなあ、ここにいるいろいろ言つたつて、そのボーヤ達の力が必要だから、今二人を休ませてお前に仕事を回してるんだろう？仕方ないさ」

「そうだけど、でもっ。もっと手応えのある奴ないのぉっ？」

雪乃は絶叫（？）した。

「ないな」

修一がきつぱり言つて、眼鏡のフレームをぐつと押し上げる。

軽い近視なのだ。

「確かにあの子達はもう超ー可愛くって大切だけどおっ。本部が悪いのよ、本部が」

雪乃の怒りのボルテージがひねくれながら上がっていく。

目の中に次第に怒りの炎が現れそうだ。

「本部ねえ……。でもお前はあの二人が好きなんだろ？弟みたいなんだろ？ならいいじゃないか」

腕を組みながら修一が言う。

「よくない。私は仕事に関しては妥協しないのっ」

「……そんなこと俺達でどうにかできるもんじゃないぞ？指令は決め

られてるんだから」

「それもそうだけどね。あーあ」

雪乃はクッションを抱え込み、顔を埋めた。

これでは見目美しい大人の女性も形無しだ。

そんな様子を眺めている修一は、穏やかに苦笑中である。

「この間からあんまり元気なかったからな」

「んー？」

ゆつくりと雪乃が顔を上げる。

「おまえの元気がなかった、って事だよ。しょうがないな、シーフ
ードスパゲティでも作ろうか」

そう言うと修一はカウンターの向こう側へ行き、準備を始めた。
収納が下にあるため、修一はしゃがんでいて姿が見えなくなる。

雪乃は食器やフライパンが何かにぶつかっている音を聞きながら、
台所の方を見つめていた。

どうやら少し疲れているようだ。

表情がボーっとしている。

仕事で雪乃が持つ特殊能力を使ったせいだろう。

どんな能力でも、それを使うと多少体に影響するのだ。

雪乃はソファの上で膝を抱えて座りだした。

「疲れた」のポーズだ。

それも無意識のうちの癖である。

修一はそれにすぐ気付く。

「雪乃、仮眠しててもいいぞ？夕飯出来たら起こしてやるから」

「うーん、いいー」

クッションに顔を埋めたまま首を横に振って雪乃は答えた。

時計は午後7時を指している。

今日はこれからまだもう一つ仕事があるのだ。

こんなことはめったにない。

R-Z本部で何かが動き出しているに違いないことは、雪乃も薄々
感じている。

もちろん修一もだ。

雪乃が再びコーヒーに手を伸ばした。

夜に仕事が入っているときは眠らない方が体は動く。

一度眠ってしまうと目もさえない。

雪乃はそれを分かっていた。

だから眠らないと言ったのである。

「ねえ修ちゃん、何であの二人は組織にいるんだろうね」

雪乃は顔をカウンターの方へ向けてそう問う。

「さあ？でも小学生の時から走り回ってるって事は聞いたことあるな。あの二人はR・Z内でもトップ・シークレットだから、詳しいことを知ってる奴は少ないぞ。直接コンタクトとれるのは俺達ぐらいだし」

「そうだよな……。それに本来はあの二人Sランクだもんね。私達がいる場所とはまた違う場所にいるんだよね」

「そういうことだな。特にあの二人は特別だ。彼らに与えられてる許容範囲は広い」

「だから私達とのコンタクトも許されてる」

雪乃はそう呟いた。

そしてクッションを隣へ置くと、台所へ向かう。

引出しからフォークを二本取り出し、棚から皿を取り出した。

その時だった。

ヴィン キー カタカタカタ

オンラインでつながったコンピュータが音を立てた。

雪乃はすぐその前へ行く。

そこに映ったのは他の誰でもない、斗希の姿だった。

「昼間の分の仕事は片付いてるわよ。事後処理よろしくね」

「ああ、もうすでに処理班が向かっている。それより明日から俺は次の仕事に移る。これからこの仕事は別の奴が担当するだろう」

「そう、引き継ぎ終わったのね」

「ああ」

「嬉しそうな顔してる。何かあったの？」

雪乃が問う。

しかし斗希はいつもの仏頂面に見えるのだが、どうやら少し表情が違っらしい。

斗希は少し黙り、すぐに口を開いた。

「俺の顔が嬉しそうに見えるのなら、それは恐らく次の仕事のせいだな」

「次の仕事って？」

斗希の回りくどい言い方も、雪乃には分かっている。

こんな時は決まってご機嫌なのだ。

そんな二人のやり取りを修一は笑いながら聞いている。

「最前線へ戻る」

斗希は一言そう言った。

「え？」

雪乃の表情が変わる。

「まさか一人で、なんてことは有り得ないわよね？」

「当然だ」

「てことは……」

雪乃の中に不安がよぎる。

「まさか蒼衣ちゃんも……？」

「もちろんだ」

その言葉が重く響いた。

雪乃は目を伏せて溜息をつく。

「そう……。もうR・Z本部に戻ってるのね？」

「ああ、日々訓練に励んでいるぞ」

斗希は嬉々として言う。

「パーティーは解消したってことよね？」

「当たり前だ」

事も無げに言う。

が、雪乃が何を言いたいのかは分かっていた。

蒼衣の性格も斗希の性格もよく知っている雪乃は、蒼衣が壊れてしまわないか心配で不安なのだ。

「あまりよさそうな反応じゃないな」

斗希はカマをかける。

「そうね、いろいろ考えると反対だわ。蒼衣ちゃんのことだから、そっちへ行く時詳しい事は何も告げずにパーティーを解消したんでしょう？」

「それが？」

斗希が問い返す。

「蒼衣ちゃんとあの二人、本当に離して良かったのかしら？」

雪乃のトーンが下がる。

「伽羅ちゃんのためにも、離れるべきじゃないんじゃないかしら。

彼女の記憶は戻りかけてるわ。もちろんまた封じておいたけど、実は不安要因があるのよ」

「不安要因？」

斗希は眉をひそめる。

「彼女の中にある印象が強すぎたのよ。赤い景色だけがどうしても封じられなかった。その上心の中でタガが外れたら、もしかしたら少しずつ封じた記憶まで戻ってしまうかもしれない。分かるでしょう？彼女の不安を抑えてたのは蒼衣ちゃんなのよ」

「それがどうした？」

斗希の鋭い視線が雪乃を見つめ返す。

雪乃は言葉が出てこない。

そう、斗希に言われて気付いたのか。

R-Zには関係ないのだ。

だからこそ保護していた伽羅を、今ではハンターとして働かせている。

個人の感情など、R-Zには関係ない。

命令は絶対だ。

斗希に何を言ったところで、斗希には何の責任もないのだ。

「ごめん、分かってるわ。今は忘れてちょうだい」

雪乃は払うように手を動かした。

「分かっていればいいさ。さほど気にはしていない」

分かっているのだ斗希だって。

雪乃に悪気はない。

「そう、それならいいわ。でも正直不安よ。心配だわ。もし蒼衣ちゃんが壊れたら、って考えるとね」

力なく雪乃は笑う。

その中に見え隠れする暗いものを、斗希は見逃さなかった。

「前線を退いてからの蒼衣ちゃんは、ずいぶん明るかったわ。見てるこっちが幸せになるくらいね。…反動が大きいんじゃないかしら」

「そう心配することはない。蒼衣は納得してるし、山神さんがうまくメンタルコントロールしているからな」

斗希の口調が柔らくなる。

「Sランクハンターは別世界、ね。少し安心したわ。でも気を付けてよ？二人とも必要以上に無理しないで」

「分かっている。蒼衣にも伝えておこう」

斗希はうなずいた。

「ただし、伽羅ちゃんの事については内緒にね」

「当然だ」

斗希の偉そうな態度は年上の雪乃に対しても健在だ。

「俺はすぐ仕事に戻る、じゃあ」

斗希はそう言うのと通信を終えた。

ふう、と雪乃は溜息をつく。

すると、てんこ盛りになったスパゲティを、フライパンごと持って修一が台所から現れた。

それを丁寧皿へ移していく。

「相変わらずだな、斗希は」

修一が笑いながら言う。

雪乃は前髪をかきあげながら席についた。

表情がすっかりお姉さんだ。

「でもさ、放っておけないでしょ？あの二人…うつん、あの子達のこと」

「もちろんだ。放っておけるわけないな。あいつらに一番近くて、頼られてるのは俺達だけなんだから」

修一はいつもの笑顔でそう言った。

皿からはいい匂いが漂ってくる。

雪乃は頬杖をつきながら、修一が盛り付ける様子を見つめていた。

Stage 4

ダンッ

的の真ん中に小さな穴があく。

硝煙の匂いが漂う銃の訓練室、そこに蒼衣はいた。

「雪乃からの伝言だ。必要以上の無理はするな、らしい」

カチャ

斗希がいつのまにか入ってくる。

蒼衣は耳当てを外した。

「もう少し的小さを小さくしたらどうだ？」

蒼衣の隣へ立って、斗希がボヤク。

「別にいいんだよ、一ミリもずれてないし」

ゴト

蒼衣は銃を台の上へ置いた。

「変だよな、いつも使ってるやつよりもこっちの銃の方が手に馴染むんだ」

「当然だな。お前がこの間まで使っていたのは標準装備に少し改良を加えたものだ。しかしこれは俺達専用に使われた。手に馴染むのも当たり前だ」

「なるほどね」

そう言って銃をくるくる回す。

先刻の一発が最後だったようだ。

「ところでまだ指令が来てないようだけど、どうなってるんだ？」

蒼衣が問う。

「さあな。もう俺は関係ないからそこら辺の事は知らん。いずれ来るだろう？」

かたわらの機械をいじくり、的を動かしながら斗希はそう言った。そしてガタガタと何丁かの銃を取り出す。

「そうだ、すっかり言い忘れていたが、ここにあるのは全て俺達専

用だ、好きなものを使え」

「了解」

蒼衣が答えると、斗希がスツと銃を構えた。それを横から見つめる。

しかし。

ゴトリと斗希は従をおろした。

「的がでかすぎるな。蒼衣、あれを小さく出来るか？」

そう言つて、蒼衣のほうを見やる。

「は？それって能力^{ちから}使えつて事か？」

「もちろんだ」

がくつと蒼衣の肩が落ちる。

やれやれだ。

が、すぐに蒼衣は的を見据えた。

バシユツ

瞬時的の三分の二が吹き飛ぶ。

「このぐらいでいいんだろ？」

「上出来だな」

満足そうに斗希は言つた。

「お前なあ、能力使うとどうなるか分かつてるんだろつ？」

じと目で蒼衣が斗希を見る。

しかし斗希には効くはずもなかった。

「無論。しかしこの程度でバテはしないだろう？」

「…」

確かにそうである。

多少ダルイがバテはしない。

蒼衣は椅子に腰掛けた。

斗希は再び銃を構える。

ダンッ

勢いよく飛び出した銃弾は、小さくなった的の真ん中を射抜いた。3年も現場を離れデスクワークをしていたのにこれだ。

ブランクなどお構いなし。

嫌なやつだ。

少しもなまっていけないとは。

「お見事お見事」

やる気のない声援を蒼衣は送る。

「フツ、当然だ」

当然のごとく自信満々。

そして今頃蒼衣は気付く。

何だ、単に自慢したかったただけなのか、と。

蒼衣はゆっくり立ち上がった。

「俺、帰るぞ。お前どうする？」

「もう少し練習していくさ」

斗希はそう言うतとすぐさま構え出した。

それを見て、蒼衣は立ち去る。

もう練習は充分だ。

それよりも指令が気になる。

早くケリをつけてやりたい。

蒼衣は部屋に着くとすぐにコンピュータの方へ歩いていった。

数枚の紙がプリンターから出てきている。

蒼衣はすぐにそれを手にとり読み始めた。

「暗殺^{ハント}」の文字が目飛び込んだ。

いよいよだ、蒼衣は心の中で呟く。

蒼衣の手に力がこめられた。

R-Zビル内の一室、そこに二人の姿があった。

「芽衣、お前の弟がいよいよ最前線へ戻ったようだな」

「知ってるわ」

真っ直ぐ伸びた長い髪的女性、芽衣は遠く窓の外を見つめながらそう答える。

「明、私達も準備を始めましょう」

長い髪を揺らしながら芽衣はデスクの方へ歩いていく。
その後、明もついていく。

明の身長は芽衣の頭一個分くらい高い。

二人が並ぶとまるで雑誌から抜け出たモデルのようだ。

「特別死体処理班」：それが彼らの属するところだ。

Sランク指令のためだけに用意されているものである。

芽衣と明はすぐにコンピュータを起動させた。

「久々の最前線でどんな動きを見せてくれるか楽しみだ」

明が楽しそうに言う。

「そうね、やっとまた少し近づけたわ。この3年間：ずいぶん遠くに感じたもの」

そう、芽衣にとってこの3年間は長すぎたに違いない。

たった一人の肉親と、近い場所にいるのに会えないのだ。

芽衣はこうして見守ることしか出来ない。

彼らが最前線へ戻ったことで、芽衣の心も踊っていた。

もしかしたら会えるかもしれない…。

芽衣は期待を胸に秘め、コンピュータを見つめた。

あの日から一週間、伽羅はいつも通り学校へ通っていた。

もちろん指令もきちんとなしている。

ただほんの少し心に穴が開いているような、そんな日々を送っていた。

「伽羅お待たせ、帰ろ？」

奈緒だ。

「うん、委員会どうだった？」

「ちょっと大変だった。ほら実行委員会が設置されちゃったでしょ？だからそっちの方まで出なきゃいけないくて」

二人は昇降口へ向かいながら話を続ける。

学校ではちょっとした行事があるたびに大騒ぎなのだ。

必ずどこかの委員会が大忙しになる。

伽羅はいつも奈緒が委員会を終えるまで、最近いつもこうして待っているのだ。

二人で帰る時間は心の休まるひと時だから。

「ところで伽羅最近…!!」

こつちを向いていた奈緒の表情が変わる。

「奈緒？」

「逃げて伽羅っ!!」

「えっ？」

ガシッ

「っぐ」

大きな手が伽羅の口をふさぐ。

両手は後ろで強く拘束されていた。

「伽羅っ！」

二人の男に腕をつかまれながら、必死に抵抗する奈緒の姿が目に入る。

一瞬の出来事だった。

二人は数人の黒づくめの男達に捕らえられていた。

「まさかお嬢ちゃんが本当に生きていたとはなあ…。しかも人殺しになっているなんて、大した落ちぶれ方だ」

一人の老人が姿を現した。

「!？」

ぐっと伽羅が身をよじる。

（どうしてこの人たちが知ってるのっ？）

伽羅は顔を逸らした。

奈緒に聞かれてしまうなんて…。

心の中がまるで波立ったようにざわめき始める。

「嵯峨見愛都…お嬢ちゃんは大切な人質だ。少しの間眠ってもらよ…。やれっ」

「伽羅っ!!」

ドスッ

腹部に強烈な痛みが走った。

意識が遠のいていく。

「奈…緒…」

伽羅の体から力が抜けた。

「伽羅をどうするつもりっ？」

「ほう、威勢のいいお嬢さんだ。しかしね、こちらのお嬢さんはア
ンタとは別世界の住人さ。知らないほうがいい。そっちのお嬢さん
も眠らせてやれ」

「はい」

返事をする、男達が奈緒を取り囲む。

「ちよっ…」

ドスッ

奈緒の腹部にも強烈な痛みが走り、意識が遠のいていく。

（伽羅…）

奈緒の瞳が閉じられた。

「フン、これであの組織をつぶせるかもしれん…」

老人は不敵な笑みを浮かべた。

そう、この老人こそ3年前伽羅の両親を殺させた政治界の陰の人物、
黒川昭造だった。

その頃蒼衣達はすでに黒川低の傍で様子を窺っていた。

何台か、黒光りする車が門の中へ入っていく。

「戻ってきたな」

「ああ、しかし…一台の車にずいぶん乗っていないか？」

斗希がじつと車を見つめて呟く。

黒いフィルムが張られた車窓から、街灯のおかげでようやく分かる
人影が見えた。

確かに多すぎる。

数分後、またもう一台の車が発車して、どこかへ行った。

「どうする？追うか？」

蒼衣が問う。

「いや、黒川ではないようだ。…赤外線ゴーグルはつけているな？」
「ああ」

「一分後に行動開始だ、これだけ暗ければ充分だろう。あと三十秒だ」

「了解」

ザッ

二人は少し離れて構えた。

「雑魚は俺の能力で眠らせる」
ちから

通信機を通して斗希の声がした。

「了解。…行くぞ」

「よし」

二人は勢いよく走り出した。

門を軽く飛び越え中に潜入する。

ゴーグルに移った生体反応は六つ。

「蒼衣、走って奥まで行くぞ！」

「よっしゃ」

バンッ

「なっ、何だお前らっ!？」

瞬時ざわめきが起こった。

「ふっ、うるさい奴らだ。そこら辺で眠っている…!」

斗希が足を止め、ふっと笑う。

そしてキッと相手を睨んだ。

「なっ…」

次々と相手は床に倒れこむ。

これが斗希の念能力なのだ。

相手に催眠をかけることができる。

「サンキュ」

「礼などいい。奴はこの奥だ、いいな？」

二人は一つの扉の前で足を止めた。

そしてゆつくりとドアノブを回す。

「何だ？用があるならノックをせんか」

奥から声がした。

「残念だったな」

「なっ！？お前達はっ！？」

驚いた黒川が椅子から勢いよく立ち上がる。

二人は真っ直ぐ奴を見据えた。

「アンタなら知ってるだろう？しかしそれもムダだな」

斗希が冷酷な目を向ける。

「黒川昭造、アンタだけは許せない…！死んでもらうっ
チャッ

蒼衣は真っ直ぐ銃口を向けた。

「お、おいっ」

慌てふためき黒川がオロオロし始める。

しかし二人が動じることはない。
が。

「？」

突如黒川がニヤリと笑みを浮かべた。

「いいのかい？私を殺しても…」

「何だと？」

「こっちには人質がいる。このお嬢さんともう一人ね…
ガラッ

クローゼットが開けられる。

『！？』

そこにいたのは奈緒だった。

「もう一人はどこだ！？」

蒼衣が問う。

「もう一人？今頃港の倉庫で一人ぼっちだろうさ」

「何…？」

「誰なんだ、もう一人というのは」

冷静なまま斗希が問う。

クツクツクツ

黒川が不敵な笑みを浮かべた。

「しかしそれを知ったところでどうにもなるまい。一般人の前で私を殺すことが出来るのかい？」

かろうじて意識はあるものの、ぐったりした奈緒の顔を蒼衣たちのほうへ向けさせる。

黒川は勝ち誇ったように笑った。

しかし。

「残念だったな、って言っただろ？ 忘れたのか？」

「もうろくじじいめ」

「なっ……」

蒼衣はたじろぐ黒川に再び銃を向けた。

「人質なんて俺達には無意味なんだよ。……終わりだ」

ダンッ

蒼衣はトリガーを引いた。

弾は寸分変わらず黒川の心臓を打ち抜いている。

ズルリと黒川の体が床に倒れた。

「ふう、全く馬鹿な奴だ」

斗希はやれやれと息を吐く。

蒼衣は銃をしまうと奈緒のほうへ歩いていった。

そして猿ぐつわや縄をほどく。

「正直驚いたよ、アンタが人質になってるなんてな」

「ありがとう、少しはお役に立てた？」

ぐったりしたまま、奈緒が冗談を言う。

「充分役に立ったよ」

蒼衣は応じて笑った。

「それより、伽羅が危ないわ。今すぐ行って」

「ああ、アンタは一人で平気か？」

「うん。港の第5倉庫よ、そこに伽羅はいるわ」

「サンキュ」

蒼衣はそう言うと、斗希と二人で走り去っていった。
部屋には奈緒だけが残される。

（お願い、伽羅を助けて…！）

奈緒はふらつきながら立ち上がり、急いで部屋を抜け出した。

波の音だけが響く港の倉庫、そこへ蒼衣達はバイクを飛ばした。
そう遠くはない、もう倉庫は見えている。

恐らく田所が何らかの形で伽羅のことを黒川に伝えたに違いない。

黒川ほどの大物が暗殺組織の存在を知らないはずがないのだ。

伽羅を使ってR-Zを陥れようとしていたことはすぐに想像がつく。

二人は5の書かれた倉庫前にバイクを止めた。

「鍵がかかってる」

「重そうだな」

斗希がゴーグルで鍵の大きさを測定する。

「俺が開ける」

蒼衣はそう言うと、目を閉じ一点に神経を集中させた。

すると倉庫の中に金属のこすれあう音がこだまする。

「何者だっ？」

黒づくめの男達の中から飛び出してきた。

「ちっ。お前等など相手にならん」

「全く同感」

「蒼衣、お前は行け。こいつらは俺が」

斗希が言うと蒼衣はうなずき中へ向かう。

そして次の瞬間、目の前で銃を構えていた男達が次々と倒れこんで
いった。

「伽羅！」

中へ入ると手足を縛られたまま伽羅が倒れていた。

蒼衣はすぐに縄をほどき抱き起こす。

「伽羅？」

「…蒼衣…？頭がぐるぐるするの…それに蒼衣が万華鏡みたいに見える…」

朦朧とする意識の中で伽羅は呟くようにそう言った。

「何だつて？まさか…麻薬！？」

蒼衣は伽羅の腕を持ち上げた。

あつた…！

薬を打った跡だ。

早く解毒剤を打たなければ大変なことになってしまう。

蒼衣はすぐに山神に連絡した。

近くで待機している山神ならすぐにここへ来る。

数分後、山神が車でやってくると蒼衣はそこへ伽羅を乗せ、斗希と二人で山神の後をバイクで走った。

R-Z本部へ行けば解毒剤がある。

ビルへ着くと伽羅はすぐさま医務室へ運ばれた。

医療技術も持ち合わせている蒼衣は手際よく伽羅に点滴を打つ。

ぐっすり眠る伽羅を見ると斗希と山神は医務室を出た。

蒼衣はぎゅっと伽羅の手を握る。

自分のいない所でこんな事が起きるとは…。

もしや伽羅の記憶が黒川に会ったことで甦っているのではないか。

蒼衣は眠っている伽羅の顔を心配そうに見つめた。

点滴は一定の間隔をおいて一滴ずつ落ちていく。

Stages

伽羅の目が覚めてから一番に目に入っただのは点滴だった。

「蒼衣…」

名前を呼んでみる。

が、返事はない。

「いるわけないか…」

ポツリと呟く。

どうやら自分は病院のようなところにいるらしい。

伽羅は辺りを見回した。

出入り口の他にもう一箇所、カーテンで仕切られている場所を見つけた。

あの部屋は何だろう。

少し見つめてから、伽羅は再び天井を見つめた。

まだ少し頭がぼんやりしている。

すると

「はよ。気分どうだ？」

奥のカーテンを開けて、蒼衣がやってきた。

「あ…、うん。大丈夫、少し」

どうやら伽羅は安堵したらしい。

弱々しくも明るく笑った。

「ドラッグ打たれて幻覚症状起こしてたんだ。でも解毒剤打ってるから、そのうち意識もはつきりしてくるはずだ」

そう言っただけ、蒼衣は側にあつた丸椅子に腰掛ける。

伽羅はじつと天井を見つめていた。

そして。

「ね、蒼衣…。話してくれないかな、3年前のこと」

「!？」

蒼衣は驚きを隠せなかった。

やはり、記憶は甦っていたのだ。

「ずっと、少しずつだけど思い出し始めてたの。それであの人の声を聞いて、全部思い出した。ぼやけて動く影は、倒れていくお父さんとお母さん。あの赤い景色はその時の血で、鈍い銃声がして、私にあの冷たい銃口が向けられてた」

「本当に、全部思い出したんだな？」

「うん…。すごく怖かった、でもお父さん達の事忘れたくないの。このまま忘れたくない。私は一人じゃなかったんだもん。だから話してほしいの。そうしたら思い出に出来るでしょう？」

強がっているわけではなかった。

が、下を向いたまま蒼衣はうなずくことが出来なかった。

「知らずにいるほうが苦しいよ。思い出せないほうがつらい。だから…お願い、蒼衣」

伽羅の澄んだ瞳が蒼衣を見つめる。

すると、蒼衣は覚悟したように息を吸った。

「分かった」

そして蒼衣は話し始める。

「あの日俺と斗希は標的の動きを追ってたんだ。そして偶然にも奴らはお前の家へ入っていった。でも俺たちは家の中まで入るわけにはいかない。だから外ですつと見張ってた。夜つてこともあって周りには誰もいなくて、ゴーグルで中の生体反応を見ると、5個の反応があったんだ。それから数分後、突然銃声が聞こえた」

遠くを見つめて話す蒼衣。

「お父さん達が、撃たれたのね？」

伽羅は蒼衣の顔を覗き込んだ。

「ああ。俺たちは急いで中へ入った。でももうお前の両親は殺された後で、奴らの銃口はお前に向けられていた。俺達は奴らの手を封じて、お前を助け出したんだ。お前は気を失ってたから、その後の事は覚えてないだろうけど。俺たちが外にいた間、中で何が起きていたかは分からない。でもこれだけは確かだ。お前の両親は、お前

を守ったんだ」

最後にそう言って、蒼衣は優しく微笑んだ。

「そっか…」

そう呟いた伽羅の目には今にも溢れそうなくらいの涙が浮かんでいる。

まだどこかで強がっているのだ。

必死に涙をこらえようとしている。

「バカだな。泣いていいよ、俺しかいないんだから」

蒼衣はそう言って伽羅の額に手を当てた。

そして伽羅が蒼衣の手の上に自分の手を乗せる。

涙は自然に零れ落ちた。

「あと一つだけ聞いてもいい？」

「ん？」

蒼衣は耳を傾ける。

「私が蒼衣を好きな気持ちは、誰かに作られたものじゃないよね？」

「…」

伽羅は密かに不安になっていたのだ。

もし自分の記憶が誰かに封じられていて、作り変えられていたとしたら、蒼衣を想うこの気持ちはもしかしたら「作り物」なのかもしれないと。

「俺は、詳しい事は知らない。だけど、もう手遅れだよ」

「？」

伽羅は蒼衣の顔を見た。

彼の頬は真っ赤に染まっている。

「俺はもう前には戻れないからな」

「蒼衣…。蒼衣は知ってる？私がいつから蒼衣を好きだったか」

「知らない」

蒼衣は耳まで真っ赤になった顔をうつむかせた。

伽羅は嬉しくなって泣き笑いになってしまふ。

「私にも解らない。でも、この気持ちは作り物じゃないよね」

伽羅はそう言つて、また涙をこぼした。

照れた顔で、蒼衣が笑う。

いつもと変わらない優しい笑顔。

それを見てしまうと余計に涙は止まらなくなった。

自分の手を握ってくれてる蒼衣の手が温かい。

伽羅の手がすっぽり隠れてしまうほどの、温かくて大きな手。

大丈夫、私には蒼衣がいてくれる。

だからきちんと思い出に出来る。

：お父さん、お母さん、ありがとう。

伽羅は心の中で呟いた。

「良かった、伽羅ちゃんもう大丈夫ね」

窓の外で雪乃は二人の姿を見守っていた。

斗希から連絡をもらった雪乃は急いで飛んできたのだ。

もしものためだ。

しかしどうやら雪乃の能力を使う必要はなさそうだ。

「今こうして考えると、伽羅ちゃんの記憶を封じたこと、あれは本当に良かったのかしらね」

「その答えは本人が決めることだ。大丈夫だろう、何せ蒼衣の選んだ奴だからな」

ガラにもなく斗希が言う。

「何よ、何だかずいぶん優しいじゃない？」

からかい半分で雪乃は言った。

横では修一が笑っている。

斗希の気持ちは何となく分かるのだ。

全く、素直じゃない。

本人がいたら今のようなことは絶対言わなかっただろう。

意外と不器用なのだ、斗希も蒼衣も。

雪乃と修一は顔を見合わせて笑っていた。

「それにしても蒼衣ちゃん、ずいぶん強くなったわね。少し前とは比べ物にならないくらい強くなったわ。何があの子を強くしたのか

しら」

「…なんだ、急に」

斗希が雪乃の方を向いて問う。

「つまり、守るものがあつたから強くなれた、違う？」

雪乃は斗希に視線を向けた。

「本当は斗希ちゃんも分かつてたんじゃない？ だけど、敢えて離れた。本当に壊れないかどうか、その結果を信じたいから」

「…さあな」

斗希はわざとらしく首をかしげた。

「ねえ、本当にこのままでいいの？ 今がベストだとは思えないわ。

斗希ちゃん、一人が嫌なら蒼衣ちゃん達と一緒になればいいのよ」

「別に俺は一人でも構わないさ、馴れ合うのは好きじゃない。それに蒼衣はともかく、あの二人は嫌がるんじゃないのか？」

「…そんなことないんじゃない？ だつてずっと蒼衣ちゃんを見てきたのよ？ あの二人は。問題ないと思うけど？」

くすつと笑つて雪乃は言つた。

いつもと変わらない態度の中に、斗希の寂しさがほんの少し見え隠れする。

これは今に始まつたことではないはずだ。

一番寂しがり屋なのは本当は斗希かもしれない。

雪乃はそんな斗希を可愛く思ふのだった。

コンコン

ドアがノックされた。

そしてドアがカチャリと回されると静かに雪乃が入ってきた。

「どう？ 気分は」

雪乃が優しく微笑んで問う。

「もう大丈夫です。気持ち悪いのも治つたし…」

伽羅は笑顔で答えた。

「そつえばまだ名乗つてなかつたわね。私は雪乃よ、よろしくね」

「こちらこそ」

「うん、大丈夫そうね。顔色もだいぶ良くなったみたい。あとは食べるものちゃんと食べて、しっかり体力つければ起きられるわね」
雪乃も心配していたのだ。

それはその表情からも分かる。

一滴ずつ落ちていた点滴も、もう三分の一程度になっていた。

「ねえ伽羅ちゃん、手を握ってもいい？」

「？はい」

細く暖かな手が伽羅の手を包む。

「ゆっくり目を閉じてね」

そう言われると、伽羅はそっと目を閉じた。

体中が温かくなっていく。

春の日差しのように温かく、気持ちがいい。

（ここは…どこ？）

見えるのは一面の花畑だ。

（お父さん？お母さん？それに…小さい頃の私…？）

夢を見ているのだ。

夢だとすぐに分かる、夢。

でもどこか現実のような気もする。

伽羅は静かに眠り始めた。

「大丈夫よ、眠っただけ。…あのこと、話したんでしょ？」

「うん」

蒼衣は不思議そうな視線を向ける。

「私から伽羅ちゃんへのちょっとしたプレゼントよ。優しい思い出も必要でしょ？今のままじゃショックが強すぎて、優しい思い出まで自然とデリーとされちゃうわ。だから、ね」

雪乃は穏やかに答えた。

「伽羅ちゃんは逃げようとしなかった。ちゃんと真実と向き合った。だからごほうびよ。一生傷は消えなくても、優しい思い出が残っていれば、絶対がんばって生きていける。…そうね、蒼衣ちゃんにも

「ごほうびをあげなきゃ」

そう言っていると雪乃はまるで子供を抱きしめるように蒼衣を抱きしめた。
「蒼衣ちゃん、体の中に残ってる毒は今のうちに全部出しちゃいなさいよ。私が全部消してあげるから」

「雪乃さん……。俺、どうしていいかずっと分からなかった。ずっと不安で、心配で。俺、組織が考えてること解んないよ。何で俺達なんだろう、最前線に行かなきゃいけないくて、いつも振り回されて」
素直に蒼衣の口からはそれらの言葉が出てきた。

今まで誰にも言えず、抱え込んできたもの。

それでもまだ全てではないだろう。
でも。

「そうね、人は誰でも答えの出せない悩みを持つてるものだわ。私達の場合、それが少し大きいのね。だから辛くて苦しくて。でもね、大丈夫よ。その分蒼衣ちゃんは強くなったわ。それにもう、伽羅ちゃんを傷付けるものは何もなくなっただわ」

「そうかな……」

「ええ。後は蒼衣ちゃんがそばにいてあげて、喧嘩をしなければね」
雪乃は冗談めかしてそう言った。

そんな雪乃に蒼衣は身を任せる。

姉のようで、母親のように温かい。

次第に心が軽くなっていく。

「ありがとぅ、雪乃さん。もう大丈夫だよ、斗希の所に行こう」

雪乃もうなずき立ち上がる。

二人は静かに部屋を出た。

そしてそれから二週間が過ぎた。

「俺もーヤダッ！何でこんな奴がいるんだよーっ！」

突然蛭から抗議の声があがる。

「いちいちうるさいな、このほたる（……）は。全くどういう躰をしたんだ、蒼衣」

「つかーっ！ほたるっていうな、ほたるってっ！」

「あんまりいぢめるなよなあ。フォローすんのは俺なんだから」
呆れ顔で蒼衣が返した。

まるで犬とサルだ。

あの後何故か上からの命令で、こうして斗希も一緒になったのだ。
もちろん、蛍と伽羅も一緒に、以前暮らしていたマンションで。

蒼衣も、最初から蛍が斗希を毛嫌いしているのは知っていた。
確かに分かっていたはずである。
が。

ここまで来るともうどうでもいいかな、という気になってしまっただ。
だ。

いつものことだと。

「あの二人、性格は正反对だけど、きつと似たもの同士なんだよね」
くすくすと穏やかに笑いながら伽羅が言う。

「あのなあ……。確かにそうなのかも知ないけど、毎回巻き込まれる俺の身にもなってみる？そんな事言ってらんなくなるぞ」
と、げっそりしながら蒼衣が言う。

「要領が悪いのよ、蒼衣は」

そう言っつて、伽羅はまた笑った。

蒼衣は深く溜息をついた。

返す言葉もない。

そんな蒼衣の横でまだあの二人は言い合っている。

蒼衣は横目で二人を睨んでやった。

いい加減やめてほしい。

心底そう思う。

あれから、伽羅は少しずつ元の明るさに戻り始めていた。

少しの間、奈緒に正体を知られてしまったショックや、記憶が甦ったことなど、精神的にこたえたらしく、何も食べられなくなり体調を崩して寝込んでいたこともあったのだ。

けれど今はこうして起き上がり、このやかましきでも笑っていられ

るほどになったのだ。

蒼衣は心配しつつもほっと安心し、微笑みがこぼれた。

コポコポコポ

コーヒーの何とも言えない香りが部屋に漂ってくる。

「ねー、修ちゃん、チーズケーキと抹茶ケーキどっちがいい？」

キッチンで雪乃が嬉しそうに問う。

「抹茶。ん？お前二つもケーキ焼いたのか？」

手にしていた本を置いて修一が立ち上がった。

「うん。まあいいじゃないの」

「ほー」

「後で蒼衣ちゃんの家を持っていこうね」

嬉しそうに雪乃は笑ってそう言った。

そんな雪乃を見て修一も自然と笑みがこぼれる。

そして再び本を手に持ち目を通し始めた。

本を読んでも雪乃の笑顔が思い浮かぶ。

修一はそんな自分に照れながら平静を装って、コーヒーを口にした。

それは平和な午後の、ほんのひと時…。

よく晴れた日曜日。

外へ出ると眩しい太陽がビルの立ち並ぶ街並みを照らしていた。

横をすり抜ける風が温かい。

どうやら春ももうすぐのようだ。

新しい季節が始まる。

そこにはほんの少し大人になった横顔があった。

今はまだ何も見えない。

でもきつと、この先には必ず道があるはずだ。

例えばそれが血に染まっていなくても、周りには支えてくれる誰かがいる。

仲間であり、ライバルであり、大切な誰かが。

日に透けて薄茶色になった蒼衣の前髪を優しく風が揺らす。

こんな日は一人で外を歩くのも悪くない。

蒼衣は桜並木を歩き出した。

木の枝にはたくさんのお花が咲いている。

今たくさんのお花が動き出そうとしているのだ。
だから…。

蒼衣は歩き出したのだ。

暗闇の広がるその未来へ、光を求めて。

「姉さん、俺…強くなれるかな…」

蒼衣は呟いて空を見上げた。

雲一つない青空。

それは遠く姉の、笑顔のこたえのようだった…

F i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9504z/>

RED ZONE

2011年12月29日19時51分発行